

ところで、その知的解放に於てさうした未しいものを残してゐた反面、その思想的立場として自然性の尊重と純情主義を持つてゐた町人は、一方に於ては前にも擧げた合理主義及びそれと關聯する計量主義といふ、これはまた知的な性質を、動かす可からざる傾向として持つてゐた。それらが彼等の世界を空想や荒唐無稽の怪異談から縁遠いものとしたと同時に、それを數字や細かい計算で満した。『永代藏』の冒頭「初午は乗つてくる仕合」の一章が、利息勘定の興味を中心とした物語である外、さういふ面を語るべき作品が町人物には少くないのみならず、數字の列擧と正確な數學的計算とを常に繰返した西鶴の一種の技巧などにも、さうした傾向の反映は極めて多く見出されるが、それよりも、さうした合理主義や計量主義をその一面の態度とする町人階級が、時に或は悲劇に逢著し、更にその根本に悲劇以上の怖ろしさを内包するとも觀られる彼等自身の積極主義や肯定的態度を、そのまま放置するものでなからうことは、容易に推定出来ることではなければなるまい。と云へば、恐らく直ちに考へられる

# 欠

# 欠

町人が、新興階級らしい力と積極性を以て、人間的なるもの、尊重と現実主義の態度とに立ち、自然性と個性的眞實（感情）の尊重とを正面に振翳して、彼等の生を果敢に生きようとしたところから、武士階級的な儒教主義道徳と彼等の態度との矛盾より悲劇を觀じ、同時に彼等自身の方向其物のうちにも暗いかげを見出して、粹と一種の調和道とに安住境を見出さうとするに到つたといふ、大體そんな輪廓のうちに繰りひろげられてゐたものであつたと云ふことが出来るのではないかと思ふ。精細な部分に就ては、小稿素より盡すことは出来なかつたけれども、少くとも西鶴の觀てゐた町人の世界は、大體そんなところにあつたやうだ。それに對して、彼は、さういふ世界を極めてよく理解しながら、然もそれに必しも満腹の同感と同情とをのみ寄せてゐたのではなかつた。其處に當時が、なほ中世的な思想の幾分を残した武士の世であり、従つて中世的乃至武士的な考へ方（世界觀）が、なほ相當な強力さを以て町人のそれと對立し、これを吟味批判しつゝあつたのであることの反映と、ひいては西鶴自身の

思想的立場などの問題が考へられるが、然しながら彼は、さうした彼自身の批判と思想的立場とも拘らず、それらの批判や思想が、昂まり行く實力を背景とした町人的世界觀の奔騰を、従つて彼等の生活を、何う拘束し得るものでもないことを知つてゐた。と云つても、彼がさういふ事實を理論として辨へてゐたなどといふのでは無論ない。たゞ彼の嚴正冷徹な寫實主義が、現實的な形の上に、さうした事實をよみ取つて來たのだ。だから彼は、彼自身の批判や思想的立場にも拘らず——それをまた屢々作中にも吐露し、時には『近代艶隱者』のやうな作品などにさへ共感的なものを見せながら、結局はたゞあるがまゝの世相を、如是として寫し出す作家として終始することになつたのだ。或はまたその點は、寫實家としての鋭さと豊富な世間知とに匹敵する程の、統一された思索と知的教養とを彼が持たなかつたからだ、云へるかも知れない。が、何れにしても、さうした彼自身の批判や思想的立場と、彼の觀且つ感じてゐたものとの齟齬が、彼の作品を、彼の觀てゐた世界其物の複雑さに、更に特殊な陰翳と

味ひとを加へた、微妙な感觸を持つたものに、仕上げさせることになつたのだと思ふ。が、此の小稿では、さうした西鶴の思想的立場を吟味し、其處に認められる武士的世界觀其他を調べた上、その喰ひ違つた觀察と思想とを、西鶴が如何に緝ひ合せたかとか、それがまた必然的に彼の作品に題材の如何なる配列乃至形象化を必至とさせたか等の問題を究明することも出来ない。此處にはたゞ彼の作品に現れた町人的なもの、投影を觀るだけで、他はすべて他日の機會を期することにして置く。

### 三 諦觀の必然

西鶴の作品の中でも「曆屋物語」(『五人女』)などは特に深刻なもの、一つに數へられてゐる。解放された人間の強い本能性追求と、さうした本能性の追求に生きる者が結局「粟田口(刑場)の露草と」ならねばならぬ世の制約との相剋を捉へて、ギリギリのところまで描き上げた作品になつてゐるのだから、それが深刻な悲劇になつたのは當然だと思ふ。

が、それ程の悲劇であつた「曆屋物語」も、考へやうによつては随分馬鹿々々しい頼りない人間の喜劇でしかなかつたとも云へるのである。誰でも知つてゐることであらうが、それはおさんのちよつとした悪戯心と、その悪戯を悪戯として完了させるだけの注意を缺いた、これもちよつとした不用意の隙に陥つた過失とが、捲起した悲劇

でしかないのだから。ちよつとした悪戯心や不用意な過失が人間の運命を重大に決定する世界といふものは、一面怖ろしく深刻なものであるに相違ないが、その動機と結果との餘りにもひど過ぎる不釣合さを考へたら、誰しも一應は馬鹿々々しく、滑稽にさへ感ずるのではないかと思ふ。おさんが少し聰明でさへあつたら、よし彼女が陥つた程の過失はあつたとしても、後の悲劇は起らずに済んだであらう。同じ題目に觸れてゐた志賀直哉氏の「暗夜行路」後篇などのやうに、それは少くとも餘程異つた形のものとなつて行つたであらう。それは茂右衛門の側から云つても同じことであつた。彼は本來おさんに對して何の關心も持つてはゐなかつた。それどころか、過失を犯した後にも、處女と思つた對手がさうでなかつたことを知つて、「重ねてはいかないかな思ひとゞまるに極め」てゐるのである。にも拘らず彼は彼女と二人の悲劇的な運命の道を通ることになつた。彼が少し自分の心と判断とに忠實な男であつたら、彼等の悲劇は矢張り如是のものとはならなかつた筈なのである。たゞ「乗りかゝつた

る馬」のはづみだけから、何の關心もない以上に避けようとさへした女との悲劇にのめり込んで行く、その惨めな自主性のなさは、いたましいと同時に、我々を呆然とさせるものがある筈なのである。

だが、それはたゞ我々を呆然とさせるだけのもので、元祿町人を呆れさせるものではなかつた。天下の町人を誇り、世を動かす實力を握つてゐた元祿町人は、彼等自身の意欲と力とを逞しく生きた。神も佛も古傳統の權威も、何も彼も無視して彼等自身の眞實と衷情とにのみ即した。其限りに於て彼等は何處までも自主的な人間主義者であつたのである。西鶴作品の意義が、さういふ町人生活の積極面を力強く描いたところにあつたことも、素より云ふ迄もない。が、既に一應觸れた通り、さうして衷情一途に生きようとするれば、刑場の露と消えねばならぬといふやうな、そんな運命が待つてゐた時代である。人間的眞實から發した新しい道義が、道德的な標準となつてゐたのではなく、眞實などとは縁のない別個の道德律が、強く人間を支配してゐた時代で

ある。人間が自主的な、決して自己を欺いたり棄てたりせぬといふ、さういふ意味での誠實さを持たなかつたことも、亦止むを得ぬことであつた。さういふ意味での誠實さを缺いた人間を製造したところに、近世封建制度の何ものにも増して憎惡さるべき害惡があつたのであり、町人が所謂町人的卑俗さ以上のものを多く持ち得なかつた必然も、無論其處から來たのである。心にもない過失をさういふものとして處理することが出来なかつたおさんも、重ねては交渉も持つまいと心に極めた女と手を携へて出奔した茂右衛門も、さういふ元祿町人としての典型的な存在であつた。だから茂右衛門の如き、同じ作中の人々達から、羨まれたり不義者として非難されたりはしてゐても、決して憐まれたり輕蔑されたりはしてゐないのである。

さういふ町人の世界を觀てゐた西鶴は、一方に於て煮詰められた感情の純粹さやまことの尊重を力強く打出した作家でありながら、さういふ非自主的な、その意味で頼りなく不誠實な人間の相をも、到る處に點出してゐるのであつた。彼の描いた『五人

女』の中でも、最も一途な激しさに生きてゐたかと思はれるおせんなどにも、相似た相は見出されよう。長左衛門との約束は、茂右衛門の場合同様、彼女の心からの要求ではなかつた。たゞ長左衛門内儀の理不盡な嫉妬に對する反撥だつた。だから其時の感情が永續する筈もなく、愈々彼がしのんで來たその當夜には、「内々約束今と言はれていやが成らず内に引き入れ」といふことになつてゐる。餘儀なさに曳摺られて死への道を急いだ彼女であつた貌が、十分掴み得られよう。それ程せば詰つた貌ではないまでも、相似たものは「一代女」などにも見出される。端女郎に成下つた彼女は或夜の大一座に、「正しく町の髪結らしく思はれ」る男の敵娼となり、その男の仕草に腹を立て、頭から對手にせぬつもりでゐたのが、彼の實意ある周旋にほだされて、「心よく」許さうとするに到る。ところが、そのとたんに男の身分がはつきり知れることになつて、それとともにもまた彼女の「心ざし替り」て、其儘別れて了ふことになるのである。其處にも亦自主的な、人間的感情の純粹さに生きてゐるのではない女の相が

髣髴されよう。「二代男」に乞食と契つて心中を立て通した遊女を書き、「一代男」には太夫の權威を棄て、小刀鍛冶の弟子に許した遊女を書いて、それらに心からの讃辭を送つた西鶴浮世草子中には、反面かうした人間の數多くが蠢いてゐるのである。だから其處では人間輕視や衷情蔑視も亦必然の現象となるのでなければならなかつた。「死なば諸共の木刀」(「二代男」)の若山をはじめ、西鶴の世界にはその愛情を試される女の場合が幾つか書かれてゐる。彼女等にとつて何よりも貴いものであつた筈の純粹な愛情に、疑惑の汚點を打たれるのである。然もその場合、さうしたことに對して屈辱を感じる神経や其處から來る當然の憤りは何の女にもなかつた。近代ではもう大衆作家でしかなかつた岡本綺堂が、「男の戀を疑つた、女の罪は重いと知れ」といふやうなせりふ(觀念)を中心に構へてものした「番町皿屋敷」のやうな作意は、だから西鶴作の何處にも認められなかつた。りんの純情に小汚く功利的な挨拶を返した茂右衛門に對するおさんの怒り、戀文の代筆を頼まれてゐるうちに、其男が何時となく可愛

らしく成つて了つた「一代女」の愛に、同じやうな小汚さで應へようとした男に對する「一代女」其人の憤激など、相似た性質の現れは隨所にあつても、試される女が試されるが故に反撥する作意などは終に思ひつかれなかつた程、さういふものへの意識的な尊重などは、縁遠い當時の世の中であり人々であつたのである。皆川の清十郎への試し（『五人女』）も、何がなし遊女の手管らしいものとしてしか扱はれてゐなかつた。と同時に、小刀鍛冶に許した吉野（『二代男』）が、請出されてから親類縁者に爪はぢきされた時、彼等を巧に綾なしてこれを心服させたのは、當時の世相に於ける自由人の卓越と勝利とを語るものとして、随分積極的な意義を持つ話であつたけれども、然もその場合に於ける吉野の勝利にしても、彼女が彼女としての生き方なり本質なりに於て、勝ち得たものではなかつた。赤前垂の下女姿にまで自ら屈することによつて、漸く妻君適任證を與へられたとも觀られるのであつた。其處にも此處にも、誇りのない、その意味で弱く自卑的な人間の相が、考へられていゝのではないかと思ふ。

が、若山や吉野の場合は措いてもいゝ。潤達と豪快とを剔出し讚美するのを一面とした西鶴の人間觀察の他の一面が、それを頼りなく非自主的な、始終何かに繰られ動かされてゐるだけの無力なものと規定するところにあつたことは、或はやゝこし過ぎるかも知れない若山や吉野の場合を除いた如上の説明だけでも、一通り理解される筈だと思ふから。人間をさういふものと觀てゐた西鶴は、例へば『一代女』の中などでは、境涯に曳摺られて何うにでも變つて了ふ人間の無力さを、繰返し繰返し云つてゐる。それは題材が女性の愛慾生活であつただけに、其處ではそれが主として女性と結びつけられて、「女程變り易きものはなし」といふやうな説明を與へられてゐたけれども、それが依存的な生活態度の故にさういふ點を特に顯著に示してゐる女性に於て捉へられた、人間一般に通ずる性質の一つと觀られていゝものであつたことは、彼が茂右衛門のやうな男を描いてゐる點だけから云つても、容易に知られる譯であらう。周

團の條件に規定されてその時々的心になつて行く男を、他にも屢々書いてゐない西鶴では無論なかつた。

と同時に、人間生活を諦視する誰でもが突當らねばならぬ無常觀が、西鶴の眼底にも矢張り映つてゐた。『五人女』の「八百屋物語」の如き、それを殊にはつきり觀じさせよう。其處に特に色濃く打出されてゐたやうな無常觀を一面の人生觀としてゐた西鶴が、人間を弱く憐れく頼りないものと觀るのは、愈々必然の數であつた。無常を凌ぎ憐れさを超えて人間の營みがいろいろの發展や組成を成就させてゐる形にも多少は觸れながら、それを組織的な思索にまで渾成し得る西鶴では素よりなかつたのである。彼の否定的な人間觀はそれによつて當然倍化される筈であつた。

ところで、さうして人間を弱く無力なものと觀る作家が、さういふ人間を動かす何かの力に關心を寄せて行くのも、亦必然の數であらう。偶然とかふとした齟齬とか過失とかいふものゝ持つ重大な意味や力が、逞しい現實主義者であり積極主義者であつ

た筈の西鶴にも、だから當然重く考へられるものになつて行つた。さうしてその揚句には、さうした偶然や齟齬の力をすべ括る理法的なものとして、「天」とか「因果」とか「因縁」とかいふものが、彼の筆にも屢々上らざるを得なくなつたのである。『一代女』が落目になる時には、彼女に馴染んだ最負客も、不思議な程一齊に没落したり、

「忍びく〜に旦那を靡けて、自奢つきて奥様の用など尻に聞せ、後には去らする企心ながら恐ろしや、去山伏を頼みて調伏すれども其甲斐なく、我と身を燃せしが、猶此事募りて、齒黒付たる口から竹の楊枝遣ひて祈れども、更に験もなかりき。却て其身に當り、いつとなく口走りてそも〜よりの偽り、残らず恥をふるひて申せば、亭主浮名立ちて、年月の徒ら一度に露れける。」  
 (『一代女』卷三「町人腰元」)

といふやうなことになつたとしたりする、かういふ人生の觀方や感じ方は、「轉業書」の『一代男』には餘り認められぬものであつた。其處に其書の特殊な意義があるのだが、それは此處に觸れる必要もあるまい。それが讀者を意識してこれを計算に入れる



ともにも、作家的自覺に立つて正面をきりはじめた『二代男』からぼつ／＼現れはじめて、『五人女』『一代女』と漸次に強化された揚句、『新因果物語』（『二十不孝』の別名）といふやうな、それを題目とした作品集さへ現れることになつたのであつた。其處まで來れば、西鶴作中の人物は、元祿的に執拗な生への執着などとは、凡そ縁遠い弱さ脆さを生きたることにもなつてゐる。「二十九迄の一期何思ひ残さじ」とまで思ひ詰めた一代男が、「分別所也」とすぐに思案し直してゐるやうに、容易に崩折れたり死んだりせぬのが、西鶴の人間に於ける著しい特質であつたのだし、その特質は『二十不孝』などにも決して消磨してゐるのではないのだが、その反面の弱さ脆さも、其處には一筋貫通させられてゐるのである。同じ死ぬにしても、おさんやおせんが示したやうな、我に生きたがため死なねばならなかつたといふやうな、その立場からすれば或る意味で榮光的なそれとは違つて、弱々しく負けて崩折れた貌のそれが、其處には一再ならず語られてゐるのである。さうしてそれとは別であつても、兎に角關係づけては考へ

られるやうな儂さ脆さが、後になる程西鶴作中の人物には著しくなつてゐるのである。『本朝若風俗』にも、嘗て阿部次郎氏が指摘してゐた通り、愛のため廣い河をも泳ぎ渡らうとする人間の激しい情熱が、これを水鳥と見誤つた者の矢さきにかけられて空しくされて了ふ話などが收められてゐた。『懷硯』の中でも特に著名な「案内知つて昔の寢所」の中には、齟齬と誤認と輕卒とが、幾人もの人間を死なせる怖ろしい悲劇の動機となる話が語られてゐた。前にも書いて來た、一寸した過失や不用意が重大な結果を齎らす人生の怖ろしさ、乃至さういふ怖ろしさに繋ぎ止められたり翻弄されたりしてゐる人間の弱さ無力さが、其處に端的に描き出されてゐるのである。『織留』や『俗つれづれ』を経て、遺稿として出版された『文反古』が果して西鶴作であつたとしたら、それは彼に於けるさうした否定的人間觀察の凝つて結晶したものと云へよう。その卷三「代筆は浮世の闇」の如き、ふとした慾に驅られて犯した罪の因果故に、自殺することも出來ない——それだけの力と自由とをさへ持ち得ない人間の地獄の苦痛

が、陰慘を極めて描き出されてゐる。それが果して西鶴作であつたか否かは多少問題が残るとしても、少くとも其處を一つの結論的な到達所とすべき否定的な人間観は、確に西鶴の中にもあつたのである。有徳な町人であつた彼が、妻には早世され、不具の娘にも夭折されて、比較的夙くから世を捨て頭を丸めた隠居の境涯に入つてゐたといふ傳記が信すべきものであつたら、さういふ結論にも惹かれ易い一面が彼のものであつたことも、愈々信じ易くなる道理であらう。兎に角彼はさういふ人間のしがなさを観、人生の怖ろしさを観て、其處に怖れと戦慄をも感ずる人間であつた。一昔前の西鶴論にはよく引かれた『一代女』の結末近く、「夜發の附聲」に示された悔と戦慄の不氣味さなどだけでも、それを十分に思はせよう。西鶴は決して逞しく圖太いだけの積極主義者ではなかつたのである。

然も一方に於てさういふ否定的な人間観や戦慄を感じながら、他方に於て克服し難い本能性なり人間意欲の奔騰なりを観る時、それがたゞ讚美すべき力の發現としてのみ認められる代りに、厭離し難い本能の繫縛として持て餘されることになるのも、亦必然の數であらう。金に憑かれ役せられるものゝ醜陋さとか、力もなくて本能にひかれてゐるものゝ慘めさとかいふものも、西鶴作中には屢々剔出されてゐる。金への執着から狂ひ死する人もあつた。愛を奪はれた口惜しさからの恪氣講などといふ滑稽なものもあつた。當の敵手に紛ふ人形を作らせ、腰元下婢にその人形を苛ませて私に溜飲を下げるなどといふ、唾棄すべき愚劣さが其處に捉へられてゐるのである。さういふ愚劣さと賤陋さを観て、それが結局厭離し難い人間の當體だと感じた時、西鶴の心に深い絶望があつたらうことも、推定するに難くないと思ふが、それよりも、強烈な意欲はあつても自主性はない——と云ふだけで不十分なら、其處から來る自尊心とか、人間的な誇りとか、ひいて人間其物を尊重する氣持とかいふものが無いのだと云はう——兎に角さういふところから來た元祿町人の相を、その浮世草子に描いた程に諦視し、然もその強烈な意欲も自主性のなさもその兩者の絡み合ひから生れた元祿町人の

歪んだ姿も、すべてが彼等にとつて必然的な、それだけ不可避的なものであることを観ねばならなかつた西鶴が、人生の悲劇と不調和とをも亦不可避と感じて、如是の諦観に落着いて行つたと云つても、決して不思議はなかつたであらう。と云ふより、上記のやうな元祿世相と町人生活とをそのギリギリのところまで見詰めた西鶴にとつては、それが必至の到達所であつたとも云へるのである。其處には何うでも人々の諦観を要請せずには置かぬ客観的な條件があつて、さうして西鶴はその條件を徹見せずにはゐない眼を持つてゐたのだから。

尤も、飽く迄も逞しい現實主義者であつた西鶴は、さうした諦観の深さを誇る代りに、まづさうした矛盾と悲劇と不調和との人生に處する心構へを、聲を大きくして唱へてゐる。が、彼の所謂教訓が、さうした意味の處世訓として成立した以上の、深い意味を持つものでなかつたことは、その教訓其物の内容が明示してゐるとともに、それがさうした人生の不調和と怖ろしさを當面の對象とした『新因果物語』——即ち『本

朝二十不孝』にまづ著しく現れはじめた點から言つても、容易に知られよう。其處に語られてゐたのは、二十人の不孝者の話であるより、寧ろ人間生活の秩序と調和を破るやうな、言はず元祿的とも言ふべき激しさへの諷戒であつたのである。だからそれは、後年の町人物に現れた生活要諦の指針と同様、或る立場からの道義を貫かうとする倫理的道德的な要求に立つものではなく、反對にどんな立場をもその徹底性に於ては肯定しまいとす——寧ろ肯定出來ぬとする、さういふ判断を土臺としての秩序指針であつたことになる。だからその教訓の基調には常に諦観主義が搖曳してゐた。さういふ點では、好色生活裡の最高道義として提示された粹の場合も、相似たものであつたと思ふ。その意味で、教訓を振翳して甚だ主張的であつたかに見えた場合でも、西鶴は結局諦観を離れられる人ではなかつたのである。諦観を根柢としての調和道の提唱といふ以上に、一つの立場を生ききらうとした西鶴でなかつたからこそ、あれ程の逞しさに生きた彼が、闘ふ人として現前する代りに、「粹法師」として印象されること

にもなつたのであらうと思ふ。

さういふ彼は、一方にはまた人生への積極的な要求や主張を棄て、所謂「あはれ」の追求に藝術家的な喜びを見出さうとする人でもあつた。「一代女」や殊に「五人女」にはそれがはつきりと認められよう。「栗田口の露草」となつたおさん茂右衛門の運命を哀惜して、

「九月廿二日の曙の夢さら／＼最後いやしからず、世語りとはなりぬ。今も淺黄の小袖の面影見  
るやうに名は残りし。」

と言ひ、お七吉三郎の儂い戀を詠嘆しては、

「さても／＼取集めたる戀や哀や、無常なり、夢なり、現なり。」

と結んだ、さういふ態度の上に成立つた「五人女」を、だから人によつては西鶴浮世草子中での傑作と評價してゐる。さういふ詠嘆的な「あはれ」追求の態度が、彼にあつて戦慄と絶望的な苦惱とに續く諦觀主義と隣り合せのものであつた貌は、上記「一

代女」の「夜發の附聲」の後に、「皆思はくの五百羅漢」のやうな、人間的な執着を突放して抒情的に詠嘆しようとする、さういふ味をねらつた一節を添へてゐる點などにも、具體的に示されてゐるのではないかと思ふ。それは、戦慄と怖れの人生を感じながら、然もこれを厭離しきれぬものが、せめて其處にある悲涼の味をでも味はうとする、そんな態度を反映するものだと思ふ。それが一步先行的に諦觀と隣り合せてゐる境地であることは、多分容易に肯定されよう。とすれば、遺作であつた「名殘の友」の洒落な境地が、執着的な人生への拘泥を棄てた、言はず諦觀の上にひらけた暢やかさのそれであつたことも、亦容易に知られる筈だと思ふ。執着に生きた「一代男」に女護の島渡りを敢てさせた西鶴が、其處では洒落に微笑みながら若干逃避的な生の諸斷面を享受してゐるのである。「浮世の月見過しにけり末二年」といふ辭世の句に現れた謙虚さとともに、それは人間的な力の限界を覺つて激しい意欲の角を棄てた、諦觀的な心境の深まりを示すものであつたと思ふ。

こんな風に観て來ると、人間に對する悲觀的な觀察と其處から來る心境的な結論とが、西鶴の裡にも存外根深く、且つそれが漸次に成長しつゝあつたことが、容易に知られる譯であらう。芭蕉がたゞ消極觀をのみ生きた人であつたのではなく、或る程度積極觀にも踏込んでゐたのと同様に——さうしてその二面の相剋を彼として出来るだけ消極的な方向に生き抜けたのと或る程度相似て、西鶴も亦積極面だけを強く生きた人ではなかつたのである。だから西鶴の世界も、たゞ單純に明るく華やかだつたのではなかつた。「わんざくれ踏ん張るべいか今日ばかり明日は烏がかつ齧るべし」といふ俗諺が當時流行してゐたといふが、西鶴の世界もつまりはそれだつたのだと思ふ。強ひて云へば、芭蕉がその住む二面の世界を抽象して、只管消極的な、寂びと侘びとの境地にのみ醇化されて行かうとしたのに對して、西鶴はその最後の作品『置土産』が示してゐるやうに、何處までもその二面の絡み合ふ世相をそれとして見詰めてゐた、其處に二人の相違があつたといふことになるのかも知れない。それだけ芭蕉程には消極

觀に醇化されなかつた代りに、全圓的な世相は押詰めて見せた西鶴であつた、といふことになるのかも知れない。だからこそ明治の小説家紅葉が、澁さの裡に絢爛を藏したものととして、西鶴の浮世草子に傾倒したのでもあらう。或る意味で澁さに統一されようとした芭蕉の世界と、それだけの相違はあるに相違ないけれども、さう云つても同じ時代の子であつた西鶴が、芭蕉とたゞ縁遠いばかりの人ではなかつたことが、よく知られるのでなければなるまい。元祿時代を逞しく生きた西鶴は、最後までその肯定面を見失はなかつたと同時に、時代の否定面にも相當深く觸れてゐたのである。

が、さう云ふことは、澁さの裡に絢爛を藏した西鶴の作風を無條件に推獎するのではなければ、況して否定的な諦觀を高く評價しようとするでもない。寧ろそれとは反對に、西鶴程の逞しい現實主義と人間肯定とを生きた作家をも、兎もすればさうした諦觀に近づかせようとし、事實また近づけましたところに、元祿といふ時代が持つた重大な問題への示唆と、さういふ時代を生きる作家的生き方への反省の契機とが、

ありさうに思はれるのである。西鶴は元祿町人としての必然を生きて客観的な必然の筋を寫した。其處に彼の寫實主義的世界があつたのだが、芭蕉は何うかするとさうした必然から一步高踏して——或は彼自身の要求に即して深入りして——そして其道を歩みきらうとした。西鶴にはその意味の高踏がなかつた。芭蕉がズレて行つたのとは違つた彼らしい健康な方向に、彼の縛りつけられた時勢的必然を乗越えて行つて、其處に打ひらけた人生展望を意欲しようとする、さういふ態度がなかつた。芭蕉が或る意味では元祿時代を越えて生きる作家であつたのに對して、彼があらゆる點で元祿時代に規定された作家でしなかつた理由も、そんなところに見出されるのではないかと思ふ。彼の世界は、随分凄く遅しいけれども、其處には同時に元祿的な馬鹿らしさ卑俗さも殆ど常に絡みついてゐるのである。さういふ彼だからこそ、「轉業書」として何の拘束も周圍への顧慮もなく、純粹に彼自身としての本來的な聲を打出してみせた『一代男』の世界を、それとして健全に發展させる代りに、其處に示されたものとは寧ろ

反對の時勢的必然に役せられた諦觀などにも、永く然も次第に深くひきつけられて行かざるを得なかつた譯なのだと思ふ。その無自覺な、それ故に後世から「俗物」などとも規定されねばならなかつた、さういふ生き方を惜しみたいと思ふのである。其處に云はゞ西鶴に於ける否定面が見出されるのだと思ふから。

## 四 自然 觀

西鶴の觀てゐた自然は、何よりも先きに、享樂の對象としてのそれであつた。

ことし又梅見て櫻藤もみぢ

父は花酒の花なりけふの月

さういふ彼は、當然しばし、自然を愛するよりも、寧ろより多く自然をダシに使つての享樂を喜ばうとする傾向を示してゐた。

平樽や手なく生るゝ花見酒

むかし男の眺めすてし片野の花にゆきて

なんと世に櫻が咲かず下戸ならば

その意味では、彼は多く自然を觀ようとはしない人であつた。少くとも、

「尾上の櫻咲て人の妻のやうす自慢、色ある娘は母の親ひけらかして、花は見ずに見られに行く」(五人女「妾姫路清十郎物語」)

「とりくの若草少し薄かりき所に花筵、毛氈敷かせて、海原靜に夕日紅、人々の袖を競ひ、外の花見衆も藤山吹はなんとも思はず、是なる小袖幕の内ゆかしく、覗き後れて歸らん事を忘れ、樽の口を明けて酔は人間の娛しみ、萬事なげやりて此女中を、けふの着とてたと嬉しがりぬ」(同上)

といふやうな、「今の世の人心」そのまゝに、自然よりもつと人間臭い匂の方を、喜んで愛着したりする人間だつた。

花散て藤さくまでは茶屋淋し

ちるや梅こゝらに茶屋があつたもの

等の句にしても、花の散る淋しさを噛みしめようとするのでもなければ、自然の風趣の移りかほりに靜に眺め入らうとするのでも無論ない。それらの句に較べると幾らか

當の對象である月光の情趣に浸り込んでゐるかと思はれる。

鯛は花は見ぬ里もありけふの月  
などにしても、結局は相似たものだらう。

枯野かな 蕨の時の女櫛

などになると、更にそれが顯著に感じられるかも知れない。冬枯れの野の佗しい趣など、此の場合、彼には何うでもいゝのだ。たゞ其處にゆくりなく見つけられた女櫛から、蕨の繁つてゐた頃までも遡つて、いろいろと聯想される人間臭い事實の方が、彼には餘ほど興味が深いのだ。だから其處には、或は彼の體臭や好みは感じられても、冬枯れの野の情景などは、全然浮び上つて來ないのだ。かういふ句の作者が、自然を觀ようとする人であつたと云つても、恐らく失當ではあるまいと思ふ。元祿といふ時代の、擡頭する町人の生活相に——殊にその享樂的側面と經濟的側面とに、主としての興味を感じてゐた人間として、それも或は當然の現象であつたかも知れない。上

記諸例とは違つて、自然其物を對象とした作品の場合にも、例へば

雲の峯や山見ぬ國の拾ひもの

のやうな、自然の實相に眺め入るといふより、もつと人間を正面に押出した、所謂小主觀的に解釋してゐる場合が多かつた。

が、さう云つても、西鶴が自然の美を全然解せぬ男であつたとは思はれない。

春遅し山田につゞく 蕨はやし

本丸の古道うづむ馬酔木かな

玉篠や不斷しぐるゝ元箱根

さして特異な感覺や深い觀照があるとは云へないまでも、兎に角かうした種類の句も、時折は彼の作中に見出される。檀林風のやゝ奇矯な表現をもつたものにも、

梢聲ありて人をおこす目覺しき初けしき

是沙汰ぞ風の吹くやうに今朝の秋



など、さういふ種類のものとして、多少面白く思はれるものがないでもない。

のみならず、彼の著「一目玉鉦」の如きは、眺望、佳景、自然の美、といふやうなものに、相當多くの筆を費して、著者のさうした方面への、或る程度の關心を示してゐる。

元來此書は、一種の地理書、若しくは案内書と觀らるべきものであり、如何にも元祿といふ町人擡頭期の、さういふ性質の書物らしく、諸國都邑の紹介的記述の間に、それら各地方の物産名物などを相當丁寧に列擧してあると同時に、著者の興味を反映して——それは併せて當時の旅の享樂への案内でもあつたに相違ないが、——各地に於ける遊里賣女の風習などを、簡單ながら面白く敘してあるところに、その特徴が認められたのであつたが、さういふ記述の間に、例へば、

#### 離 小 島

千島の美景、諸木諸島の毛色、入江の曝岩、玉敷磯の氣色、かゝる所を都の人の見残して古歌

さへ稀なり、

とか、

#### 草 賀

是よりにしのかたに里ありて、すこしの宮有、爰をしのぶの森といへり、同じ野つゞきに萩はらのいとかすかに咲残り、

とか、乃至は、

#### 初 音 原

此野にして鶯なきそめけるとなり、左の海越に大島小島見ゆる、

とかいふ種類の、風物自然に就ての記述も、相當多く認められるのだ。それも無論、旅の慰みのための案内であり、紹介であつたには相違ないけれども、それにしても此書の著者が、若干自然美への關心を有つてゐたのであることは、考へさせよう。美しい自然を、「都の人の見残して古歌さへ稀」なるを慨する邊りには、西鶴としては珍ら

しい自然美への執着さへ感じられて、時にかうした執着をさへ示す程、自然の美をも知つてゐた西鶴であつたのかと思はせたりするのである。

けれども、流石に此書にあつても、さうした自然美への愛着は、遊里賣女の風習などへの熱心な興味に比しては、密度に於てずっと稀薄なものであつた。上記諸例その他

## 盛岡

南部山城守殿城下

此所に奥の富士とて駿河なる山の形にかはる事なし、

## 磐提山

むかしは關所也、岡つゞきに里あり、今も木深き森見えわたりぬ、

といふ程度の記述と、その直き後に續く、

## 固山

此宿東路には人の情もふかし、旅人をとまれと、小手まねきの女姿もさのみいやしからず、髪

も兵庫まけに物かたく、白粉は雪の曙をあざむき、口紅は夕日に移りて、さりとはおかし、後ろ帯見よき所がらの風俗、是も一慰とて、かり枕おもしろし、

## 花牧

爰も旅人のために遊女を定め置ぬ、其役目とて三味線引て、小歌も所からにはよしや、

といふやうな紹介とを比較すれば、その點は直ちに肯かれよう。所詮、自然の美を理解しない西鶴ではなく、従つて、時にそれに心惹かれない彼でもなかつたけれども、然も彼には、より大きな興味の、一杯になつてゐるものがあつたのだ。

## わが戀の松島もさぞ初霞

たま／＼自然の美趣に心惹かれても、それをそのより大きな興味の方に引きつけたやうな形に於て表現してみようとするやうな、そんな誘惑をも感じずにはゐられない彼であつたのだ。

だから彼には、俳諧には時に上記のやうな自然の美を詠はうとした作品が認めら

れても、より人間臭い世界に没頭した小説にあつては、さうしたものは殆ど認められなかつた。『一代男』など、あれだけ諸國諸地方の「わけの世界」を踏み分けながら、その地方特有の自然に觸れようとしたところは、餘りなかつた。『五人女』にお花見が二度も書かれてゐても、上記「清十郎物語」の場合に明瞭なやうに、觀られてゐるものは花でも山でもない、たゞ人間——それも美しい女ばかりであつた。數ある彼の作品中、幾らかでも自然描寫らしいものを含んでゐた作品として、『武家義理物語』の「約束は雪の朝食」、『西鶴織留』の「保津川のながれ山崎の長者」、それから正しく彼の作であつたか何うかゞ相當強く疑はれてゐる『近代艶隠者』中の數章と、その他何かあつたらうか。強ひて探しても『本朝二十不孝』の「心を吞まるゝ蛇の形」の一節

「大隈川の水上に細き枝河の續き、其の流れの元は谷深く岩組鏡にして、落ち懸る瀧の音に耳を轟しぬ。樹立茂みて陰闇く、葉末に白玉碎き、不斷時雨のごとし。水底夏さへ氷を割りぬ。」

といふ程度以上のものは、容易に見つからぬのではないかと思ふ。小説家としての彼が、自然その物を描かうとする興味からは、完全に遠く離れてゐたことが知られる譯だらう。彼は自然を自然として高く觀るより、却つてこれを、人間生活に味をつける、一種のツマカ、小道具みたいに考へてゐたと云つた方が、何うも妥當であつたやうだ。

「五端帆の舟二艘を出島の宿の縁の前まで釣り揚げさせ、潮を湛へて數の魚を放ち、これぞ正眞の沖鯨、入目を金柑に見なし、浪の浮藻を水鉢に作り、この景色は下手な仙人より増し」(武道傳 來記「大蛇も世にある人が見た例」)

かういふ態度も到る處に見出される。無論それも元祿町人の凄まじい意氣の反映であつたらうが、さういふ氣持を有つてゐるものが、自然を自然として尙ぶ氣持をも、多少は有つてゐながら、それをより大きなものに壓倒させられて了つたのも、矢張り當然の現象であつたかも知れない。

けれども、さういふ意味では乏しい興味を以てしか取上げられなかつた自然を、人

間の生活や心理と結びつけて、極めて効果的にはたらかせてゐる點では、流石に作者の手腕の凡ならざるを思はしめる。「曆屋物語」(五人女)の切戸の文珠堂の松風など、恐らくより以上効果的な使用は見出されまい。さういふものゝ例は「一代男」の場合にも認められたし、またさういふ意味で自然と人間生活とを融け合はさせた「具足甲も質種」(西鶴織留)の冒頭など、嘗て近松秋江氏が、「異國のメリメエなどが逆立しても及ばぬ」とまで、激賞したものだつた。

「都につゞく伏見の里、通り筋の外今の淋しさ、殊更秋は物あはれに、垣根に咲たる朝顔の茶の湯の沙汰も絶えて、手釣瓶の繩をたぐり捨て、かけたり。萩は見る人もなき晝の錦、玉芙蓉の枝に泣く子の襦袢など干しける。昔の春は日暮しの御門と眺めし所も、間引菜の畠となり、兩替町といひし所も、今は錢が百ありさうなる家もなく、三文が油一文づゝが鹽賣り赤鯛さへ年越に見るばかり。京へ一里の道なれば、女の足にては夕食過ぎより行きかへる所を、貧にからまれ、大方の妻子は大佛の顔を見ぬ人ばかりなり。東に城跡の山ふかく、初茸狩せし人も皆遊興にはあら

ず、二條の八百屋よりたづねさせける。よろづの蟲を取て賣るなど、身過は草の種ぞかし。……」

『置土産』の「人には棒振蟲同然に思はれ」、「世間胸算用」のところどころなど、もつと形は小さくても、同じやうな性質の描寫は、相當數に認められよう。『名残の友』の「乞食も橋の渡り初め」なども、さういふ點で注意さるべきものを含んでゐた。直接興味の對象としてゐなかつただけに、自然描寫としてさして特記すべきものを示さなかつた西鶴が、かうした點での成功を示し得てゐるのは、矢張り彼がよく自然の情趣を、味解してゐた證據かと思ふ。

と同時に、さうした情趣や陰翳とは別に、西鶴がかなり屢々、自然を單に自然としてでなく、人間の事業や商賣と結びつけて觀てゐたところにも、一種の興味を唆られる。例へば上掲「心を吞まるゝ蛇の形」の大隈川の激湍は、美しさ故に描き出されたものでなく、たゞ主人公が「江鮭つ魚」を捉へ、ひいて漆の塊を手に入れて、祕に大

儲の機会を掴む、幸運の場所として描き出されてゐたのだつた。かと思ふと、こんな文章も見出される。

「夕の嵐朝の雨、日和を見合せ、雲の立所を考へ、夜のうちの思ひ入れにて賣る人あり買ふ人あり」(日本永代藏「浪風静に神通丸」)

つまり極端に云へば、自然をまづ享樂の對象として觀た西鶴は、一方にはまた微妙ながら、それを人間經濟生活の背景であり、いろ／＼な意味での契機であるものとして、觀ようとしてゐたのだ。「一目玉鉾」にも、

中 田

此里のすこし西にあたつて、生出の森有、裾野は玉笹みだれ、細川より埋木ながれ出、香灰に焼也、

といふ種類の記述が、隨所に認められた。さうした觀方と、享樂的な立場よりの觀察とを主としてゐたところに、彼が如何にも元祿期の町人らしい立場から、自然を觀て

ゐたのであつたことが思はれ、従つて彼の捉へ得た自然の情趣も、主として享樂的な情調とか、貧富の生活雰囲気とかに、融け合つたものとして描き出された場合に、特に卓れたものを感じさせることが多かつたのではなかつたかとも思はれる。それへの鋭い感覺はあつても、彼は結局小説家であつて、自然詩人ではなかつたのである。

註 俳句はすべて有朋堂文庫の「西鶴句集」から引用した。

## 五 描 寫 力

「西鶴に就いて何か隨筆的に」と云はれて、何の氣もなく有朋堂文庫を開いてみたら、『永代藏』の卷四第五話「伊勢海老の高買」の章にぶつかつた。堺町人の經濟意識を取り扱つた作品だが、一應讀み返してみるにつれて、矢張り西鶴らしい對象把握の正確さに、今更ながら感心させられた。

堺といへば、例の室町以來の對外貿易のために、商港として殷賑を極めるといふものに、嚴しい武士の羈絆から遁れた特殊な自由都市として、町人生活の濶達さと豪華さとを誇つた歴史を有ちながら、南蠻貿易が對明貿易とかはるに及んで、その貿易港としての使命を長崎その他西方の諸都市に奪はれ、大阪の躍進によつて商業都市としての繁榮を抑へられて、次第に消極的退嬰的な方向へと傾くことを餘儀なくされたところ

ろであつた。「伊勢海老の高買」には、さうした歴史を背負つた堺の町人達の生活態度と經濟意識とが、鮮かに剔出されてゐるのだ。

「堺といふ所は俄分限者稀なり、親より二代三代つゞきて、古代の買置き物今に賣らずして、時節を待つは根つよき所なり、朱座落着、鐵砲屋は御用人、藥屋仲間は慥に長崎へ取りやり、銀餘所より借る事なし。世間うちばにかまへ、又或時はならぬ事をもするなり、南宗寺の本堂庫裏に至るまで一人しての建立殊勝なる事なり、心はともあれ風俗は都めきたり、此前京の北野七本松にて、觀世太夫一世一代の勸進能ありしに、金子一枚宛の棧敷を京大阪に續きては堺へ取りける、至穿鑿もこれにて知れぬる。」

所謂大川に水絶えぬ堺の町の傳統的な富貴さが、此の一節などには端的に打ち出されてゐると云へよう。豪華を誇つた昔の堺の名残りである。

然も其處には、さうした豊かな「至穿鑿」の反面に、飽く迄も消極的な、只管つましく慎ましやかに、破綻なき生活を守らうとする態度が、町全體の空氣となつてゐる

のだつた。

「人の身持しとやかにして十露盤現にも忘れず、内證細かに見かけ奇麗に住みなし、物毎義理を立て、随分花車なる所なり、然れども年のよる所にて外より行きて住家は成りがたし、元日より大年までを一度にもり付けて、其外は一錢も仇につかはす、諸事の物年々拵へて儘なる世帯なり男は袖縞の羽織一つ、卅四五年も洗濯せず、平骨の扇は幾度か風にあはせける、女は又嫁入著物そのまゝ娘に譲り、孫子までにも傳へて折目も違へずありける。」

これが云ふ迄もなく既に停頓と衰退に傾いてゐた元祿時代の堺の町の他の半面であつたらう。然もそれが、既に衰退期にあつた堺としては必至の現れであつただけに、上記のやうな傳統的な豊かさより、より支配的な町乃至町人生活の特徴となりつゝあつたものに相違ない。云はゞ上記のやうな豊かさを底深く包みながら——その包まれたものゝ露頭をとところ／＼に示しながら、全體としてはかうした衰退期らしい態度と心構へとが支配してゐたのが、當時の堺の空氣であつたのだ。

ところで、既に堺がさういふところであつたからこそ、其處では、

「蓬萊は神代此方のならばしなればとて、高直なる物を買ひ調へて、これを飾る事何の益なし、天照大神も咎めさせ給ふまじと、伊勢えびの代りに車えび、橙の代に九年母をつみて、同じ心の春の色、才覺男の仕出しと、其年は堺中に伊勢えび橙一つ買はずに濟ましぬ。」

といふやうな、女チな工夫の流行することにもなれば、夜更けての一文商ひを粗末にした手代を、門口に深さ三尺もの穴を掘らせるといふ程勞力の浪費をさせてみた揚句、さて懇々と戒めるといふやうな遣り方も、如何にも土地柄に相應しい現象として感じられもするのだ。その通りの事實があつたものか何うかは知らないけれども、兎に角さうした二つの事件を、上記のやうな背景の上に浮み上らせて、それによつて堺といふ町の空氣や其處に住んでゐる人間の生活相を、はつきり印象させるものにしてゐるところに、西鶴の堺町人生活へのよき把握が認められ、そのよき把握の端的に打出されてゐるところに、此の短篇の値打ちがあるのだ。歴史的な華やかさを背景とし

て、現在の消極主義が漂はす憐れなかなしさへ、其處にはほのかに感じられるのではないか。

さういふ點からの聯想は、矢張り大阪の隆昌に壓されて昔の榮華を跡かたもなく失ひ盡し、今は只管廢滅の空氣のみ漂ふ伏見の町の景情を寫して、名文の譽高い「具足甲も質種」(『西鶴雜留』卷五)や、「世はぬき取の觀音の眼」(『永代藏』卷三)などを想ひ出させると同時に、昔も堺とその貿易港としての殷賑を競ひ、後にも對明貿易上の須要港として繁盛を誇つた長崎の、活潑大規模な商況とさうした商況の中に鋭く機會を掴み出しての來ようとしてゐる人間の積極的に緊張した姿とを描いた、「心を疊み込む古筆屏風」(『永代藏』卷四)などを對比的に考へさせ、ひいては京大阪奈良伊勢以下到るところの國々土地々々の、經濟的特殊性とそれに依存する生活態度や慣習が、單にさうした經濟的な側面に於てのみならず、消費的享樂的な面にも即して、精緻に描き分けられることなども、今更ながらに考へさせる。『一代男』などが、さうした消費的

享樂的な面に即して、如何に多くの土地々々を鮮に描き分けてゐたことか。寫實家西鶴の冷徹な眼が、無論さうした描き分けを可能にする程、正確な對象への把握を彼に有せてゐたのであつたが、然もさうした把握の正確さがあるだけに、西鶴作品に於ける題材の取合せには、有機的な連絡を缺いた失當さは、決して多くは見出されない。上記「伊勢海老の高買」や乃至は「心を疊み込む古筆屏風」などが、さういふ意味での題材各部分相互間の有機的な連絡を、判然と觀じさせるものであることは素より云ふ迄もあるまい。少し性質は異ふが、矢張り『永代藏』の卷一、「昔は掛算今は當座銀」などにしても、相似たことを觀じさせるよき材料になつてゐると思ふ。次第奢りになつた世相の華やかさを冒頭に述べながら、轉じて商賣は手詰り商況は活氣を失つたことの記述に移り、最後にその矛盾を解決するものとして、才覺と云へば才覺、餘りにも一寸した工夫と云へばさう云へないこともない、布の切り賣りによつて成功する人間の話をもつて來てゐるなど、寧ろ辻褄が合ひ過ぎる位よく纏められた發展に



なつてゐるのではないか。西鶴の作品は、元來構想のルーズな、それだけ筋の統一のない、云はゞだらしない作品だといふのが、大體の定評になつてゐるのだけけれども、それは主として各部分の排列の序次などに、整理されきれない混雜と無頓着さが示されてゐるためと、本筋の發展を埋め盡す程の饒舌が時に弄されてゐるためによるもので、かうした意味での全體的な統一には、さまで非難さるべきものゝ多くが含まれてゐたのではなかつたやうに思はれる。少くとも、かうした對象把握の正確さから來る題材各部分の取り合せの妥當さが、構想のルーズさや不用意な混亂を超克して、彼の作品の一つ一つを、その作品全體としては、或る渾熟を感じさせるものにしてゐるのだ。寫實に徹した西鶴の描寫力が——或は對象把握の正確さが、云はゞ二義的な序列や構想上の破綻を、凌ぎ壓してゐるものと云へないだらうか。兎に角今更ながら正鴻を極めた彼の對象把握の力であつたと思ふ。

## 六 作品の構成と藝術意識

『一代女』の卷一に「國主の艶妾」といふ章がある。西鶴描くところの元祿美人の肖像畫があるので相當著名な章になつてゐる。

「當世顔は少し丸く、色は薄花櫻にして、面道具おもての四つ不足なく揃へて、目は細きを好まず、眉厚く鼻の間せはしからず、次第高に口ちいさく、齒並あらあらとして白く、耳長みあつて縁淺く身をはなれて根迄見へすぎ、額はわざとならずじねんのはへどまり、首筋立のびてをくれなしの後髪、手の指はたよはく長みあつて爪薄く、足は八文三分に定め、親指反つてうらすきて、胸間つねの人より長く、腰しまりて肉置逞しからず、尻付ゆたやかに、物越衣裳つきよく、姿に位備はり心立おとなしく、女に定まりし藝すぐれて萬にくらからず、身に黒子ほくろ一つもなき。」

沈魚落雁閉花羞月風の舊套的な修辭を去つてかういふ肖像畫を作り上げてゐるだけ、

此章が元祿風の現實主義を強く表面に押出してゐることは、多分容易に想像されよう。肉體美の發見とそれの尊重と、随つてそのリアリスティックな記述とが、その時代に於ける現實尊重精神の一中核をなしてゐたことは、周知の通りである。

然も此の「國主の艶妾」にあつて、さういふ強い現實主義と呼應する寫實主義の眼が觀てゐたものは、さうした現實尊重と封建的家族制度との一種の相剋である。

「ある大名の御前（奥方の意）死去の後、家中は若殿なき事を悲み、色よき女の筋目正しきを四十餘人、おつほねの才覺にて御機嫌程見合、御寢間近く戀を仕掛奉りしに、皆初櫻の花のまへ方一雨のぬれに開きて、盛を見する面影、何れか詠の飽くべきにあらず、されども此のうちの獨も御氣に入らざる事を嘆きぬ。」

といふのが此章に描かれた事實の發端だが、其處には、身分高い大名の家系といふものゝために、美女四十餘人といふものが動員されてゐる。人間が輕くて身分ある人の家が重いのである。リアリスティックな美女の肖像畫を作ることと誇りと喜びとを感

ずる現實主義の強さとは、これは完全に相容れぬ力の支配する世界である。さういふ世界——つまり人間が輕視されてゐる世界だから、其處に愛妾候補者が幾人登場しても、容易に満足なものは見出されないのである。此の發端で「東ぞだち」の四十餘人が失格した後、話は京女百七十餘の失格にと發展して行く。もともと輕視されてゐる世界に、卓越したものは矢張り容易に見出されないのである。

が、話は既に美女の新しい肖像畫に精魂をこめたそれである。世界は無論さういふ「家」とか「高い身分」とかいふものが、「卑い人間」を玩弄するだけのそれとして終始する筈がなかつた。四十餘プラス百七十餘の多數が玩弄し去られた後女主人公一代女が登場して、今度は逆に殿様が征服されるのである。「女は——或は人間は、強い」といふ結論が、其處から西鶴によつてはつきりと引出されてゐるとは云へぬけれども、少くとも、「美しいものは矢つ張り強い」といふ程度の結論が、其處に提示されてゐるのであることは云ふ迄もない。その結論が、

といふ、此章の抑々の書出しに現れた現實世相謳歌の氣持や上記のやうな肖像畫の提示と、強く呼應し合つてゐるのである。此章の持つ現實主義的性格は、かう辿つて來れば、愈々明瞭にならずにはゐまいと思ふ。

ところで、こんな風に觀て來ると、此章は、元祿時代を支配した二つの物の考へ方の錯綜に、或る程度まで秩序立てた表現を與へたものと云ふことが出來よう。身分とか家系とかいふものを尊重した武士的儒教的なもの考へ方と、専ら人間の資質とか力とかいふものを尊重しようとした町人的現實主義的なもの感じ方との、相剋から後者の勝利へといふ筋が、臍ろ氣ならず其處に辿り出されるのだから。人間を輕視したが故に結局（卓越した）人間から手痛く復讐された——そんな筋の話だと云つても差支へない譯である。

とすれば、其處に西鶴が住んでゐた世界の實相と、それを貫く一種理法的なもの

が兎に角指摘されてゐたことにならう。武士が支配して町人が實力を持つてゐた時代の相と、強く權力的なものは「高い身分」乃至それと關聯するものとのみ結びついてゐたやうであつて、實際はそれらが人間的資質即ち「實力」に壓倒されてゐたのであるが、其處に提示されてゐるのだから。西鶴作品の根本的な骨格の一つが其處に認められることになる。

元來彼の作品は、自然主義が小説を隨筆化したといふのと同じ意味で、隨筆的だと云はれてゐる。と云つても、それは單に恣意的な空想の動くにまかせた、秩序も統一もないものといふのではなく、俳諧的な聯想の繋りと飛躍とを中樞的な骨格として、其上に組立てられたものだと言はれてゐる。それらは何れも正しい觀察なのであり、其處に云ふ俳諧的な聯想の糸といふものが、リアリスト西鶴の目の鋭さ確さと結びついた時、上記のやうな意味での筋——即ち必然的な展開とか客觀を貫く理法的なものとかいふもの、剔出に成功することになつてゐるのである。『一代女』の卷二「諸禮

「女祐筆」などを観ると、彼がおぼめかしいながら兎に角寫實主義を意識的な建前としてゐた作家であつたことが知られる。

「文程情知る便外にあらじ、其國里遙なるにも思ふを筆に物いはせける、いかに書續けし玉章も偽り勝なるは自見覺のして捨りて惜まず、實なる筆の歩みには自然と肝にこたへ、其人にまざまざとあへる心地せり。」

リアリテイこそ最も深い感動——即ち藝術的效果であることを、かうして流石によく知つてゐた彼は、さうした藝術的效果の上に立つ作品の構造が、矢張り理法的なものとか客觀的な筋の發展とかいふものゝ剔出を中樞的な骨格とする、さういふものであるべきことを、それとなく感じてゐたのである。だから彼の作品には、さういふ意味での筋の通らなさは割に少かつた。美しい肉體の勝利を結論とする現實主義的立場からの作品には、その冒頭からして現實謳歌の態勢を示してゐるといふやうな、内面的な氣持の上には終始繋りのある構造が却つて目に立つのである。「轉業書」であつた

『一代男』は、流石に長篇として十分成功したものにはなつてゐなかつたけれども、それにも拘らず恣意的な飛躍は存外少い、或る程度までは筋の通つたものになつてゐたし、第一その主題に即した條件の設定し方などには、無理とか破綻とかいふべきものがなく、すべてがよく計算の合されたものになつてゐた。解放された自由人の力をそれとなく描いた章の後には、さうした人間力への顯な嘆賞を盛込んだ章を書き次ぐといふやうな、各部分に於ける内部的な筋の聯關には、殊に動かぬ必然性の把握が認められた。『一代女』になると、其點は更に顯著化されて、華やかな愛慾放浪から漸次に顛落への生涯を辿つた女主人公が、境涯の不如意を惱む辛氣さ味氣なさから、漸次に荒み勝ちな氣持になつて行つた揚句には、あられもない不可能な夢に生きる人間の世界を點出し、然もそれが不可能な夢であるが故に一代女其人はさうした夢によつて救はれる筈もなく、世界は必然的に更に暗みまさつた頽廢の境地に落込んで行く、さうしてその後には鋭い悔が續けられるけれども、さうなつても矢張り斷滅し難い愛慾や

執着の強さが強調されて、それ故に結局は所謂厭離がさういふ女主人公の生涯の最後に持つて來られる、といふやうな、如何にも隙間のない展開が認められるのである。前節に挙げた「伊勢海老の高買」や「心を疊込む古筆屏風」が、さういふものらしくそれぞれの筋の通つたものであつたことなども、當然此處で聯想されよう。それらが多く稍々一筋の單純さに貫かれてゐるところに、西鶴のリズムなり元祿的な一途さなりの投影があるのだと思ふが、それは兎に角、かうした意味での筋とか必然的なものゝ展開とかいふものを捉へて、これを作品の基本的な骨格とした時、リアリズムの藝術といふものははじめて渾成されたことになるのであらう。今日の言葉で云へば、それは作品の運びや組立てを豫定するのではなく、筋や人物の心理の必然的な動きを次から次へと探して行くことになる。さういふものを對象の中に掘り當て、その掘り當てたものを積み重ねて行くのである。だからそれは作爲的裝飾的であるのとは正反對の作品構成法になる。自然主義が小説を隨筆化したといふのは、云ふ迄もなく自然主

義が裝飾的な作爲や趣向を去つて、さうした必然的な展開を骨髓とし輪廓とした作品構成法を打樹てたことを意味する。さうした現象を、寧ろ舊い趣向主義的な藝術意識の側から、小説の隨筆化などと規定したのである。西鶴作品に就て云はれる隨筆性といふものも、それと同じく、決して恣意的な無構成を意味するのではなく、却つて寫實主義文學としての基本的な特質を獲得したことを意味することになる。彼はさういふ態度とさういふ構成とを以て、元祿世相をその作品に寫したのである。然も元祿といふ時代は、町人が實力を持つて武士がこれを支配してゐた時代であつた。武士的な考へ方と町人的な感じ方との相剋が、あらゆる現象の中に認められたのであつた。西鶴の鋭い寫實主義は當然その相剋を諦視して、さうしてその相剋が何等かの結論に到達して行く過程を、深い感動をこめて形象化することになつたのである。「國主の艶妾」の構造が彼の作品に於ける典型的なものゝ一つと觀られる所以である。

尤も、さうした世相の諦視によつて引出された結論は、常に「國主の艶妾」の場合

と同断なのではなかつた。時代が既に如上の時代であつたのであり、西鶴はさうした時代に於ける必然の筋を寫した作家に過ぎなかつたのだから、其處には「艶妾」とは眞反對の結論が引出されて來る場合も少くなかつた。現に『一代女』全體の結論がそれであつたし、『五人女』中での傑作と定評される「曆屋物語」などは、さういふものゝ代表例とも觀られよう。それらの場合に於て、「町人的な本能性や感情性の尊重が打越え難い壁に梗塞されてゐる貌を觀た西鶴は、「艶妾」の展開が云はゞ喜劇的であつたのとは反對に、人生を悲劇と觀る人になつてゐる。其處で彼が所謂「ものゝあはれ」の追求を結論的な態度としてゐるかの趣を示してゐることは、恐らく多くの人が知つてゐよう。さういふ作品に重點を置いて云へば、彼も亦あはれを浮ばせるために本能性の肯定とそれへの否定精神とを嚙合せて見せた作家であつたといふことになる譯だが、それにせよ、さうした結論を必至とする筋の展開を、彼が元祿世相の裡に觀出したのであることに變りはない。所詮彼は町人武士對立の元祿世相を觀て、その對立か

ら必至に生れて來る悲劇喜劇の種々相に眺め入つてゐた作家であつたのである。けれども、彼はさうした諦視によつて捉へて來た筋を、さういふものとして知的に追求する作家ではなかつた。と云つても、散文に生き、人間解放の近世を代表する作家であつた彼が、知的でなかつたと云ふのではない。寧ろ反對に、彼が知的な追求に嚴しかつたからこそ、必然とか筋とかいふものにも觸れずにはゐなかつたのである。とは、上記範圍でも明瞭であらう。上記のやうな『一代女』の運びなど、殊にそれを強く思はせよう。それどころか、彼の作品には、恣意的な奔放さ多角さといふなどとは凡そ反對の、如何にも隙間のない知的な統一を與へられてゐるものも少くはないのである。矢張り『一代女』の卷三に收められた「調諺歌船」の如き、さういふものの好例であらう。

「多くても見苦しからぬとは書つれども、人の住家に塵五木の溜る程世にうるさき物なし、難波津や入江も次第に埋れて、水串みづくしも見えずなりにき、都鳥は陸に惑ひ、蜆つまたなとる濱も抄菜つまたなの畠とはな

と、些細なものゝ集積が意外に大きな結果を齎すことを枕に振つて、さういふものゝ集積に惱まされるしがない遊客共を點出し、彼等相應の賣女である歌比丘尼の世界を紹介して、最後にその比丘尼に墜ちた一代女のために彼等のすべてが財産を蕩盡させられたことを語り、

いかなる諸分もつかへばかさのあがる物、その心得せよ上氣八助合點か、

と結んだ此章の運びは、起承轉結すべてが餘りに辻褄を合せ過ぎた、知的な構成の目立つものと云へよう。西鶴はそれ程にまで知的な態度の上に立つてゐたのであり、さうした主知性をよくその作品の中に消化したところに、近世寫實主義の確立者といふ位置が彼のものであり得た理由もあつたと云へるのであるけれども、それにしても彼の知性（思索力）は、その程度の計算と辻褄の合せ方とを可能にしただけで、彼の觸れてゐた上記のやうな筋を、それとして明確に意識する——知的に把握する思想性の

確立の上にあつたのでもなければ、随つてさうした筋の剔出に興味以上の意義を見出す寫實主義思想の確立を成就することも出来なかつたのである。リアリテイこそ最も深い感動であり、藝術的效果であることを知つてゐながら、さうしたリアリテイの剔出だけで立派な文學が成立つとは思はず、もつと美しく、もつと面白いものが無ければ、矢張り文學にはならない、と考へる人であつたのである。

これは無論あの時代の人として止むを得ぬことではあつた。「まこと」を主張した芭蕉はそれにも拘らず周到緻密な寫實を否定し、近松は所謂「皮膜の間」に藝術的陶醉を求めた時代であつた。西鶴に於ける寫實主義意識が十分妥當に周延されたものになつてゐなかつたと云つても、素より單純に非難は出来ぬことであるけれども、兎に角さういふところから來た西鶴の藝術意識が、例へば「國主の艶妾」などの場合にも、それを上記のやうな筋の剔出とそれに伴ふ感動とだけで、十分豊かな藝術的效果を擧げ得るものとは思はせなかつたのである。結果として、その主要な筋を鮮明に印象させ

るための洗練が意圖される代りに、整理されない思考や賑やかしの技術が其處に多く盛込まれることになつてゐるのである。四十餘人の失格を「東そだち」の無骨さ故と説明して、後に百七十餘人の「京女」が矢張り失格するのは一向辻褃の合はぬことにして了つたのは前者、妾探しの御使者を「猫に石佛」七十餘歳「女中同然の男」に仕立て、其處にいろいろの可笑しみを強調し、所謂戯作的マンネリズムに魁させたのは云ふ迄もなく後者である。のみならず、四十餘人プラス百七十餘人の大量失格者の點出も、中樞的な筋と關聯した意味に於て正しく書き生かされるといふより、寧ろ一代女其人の卓越を強調するための、云はゞ誇張的な技術だけのものでしかないやうな、そんな趣をさへ感じさせかねないものになつて了つてゐるのである。四十餘人プラス百七十餘人といふ多數が輕視されたといふところから來る重苦しいものが、最後に於ける一代女の勝利への正しい裏打とならず、随つて作品が十分正しく女の勝利を描いたものではなくて、只一人の一代女の勝利を書いただけの、稍々軽い結末を持つ

お話に過ぎないやうな、そんなものにもなつて了つてゐるのである。と云つても、これは題材に對する解釋の些かの淺さを反映するだけのものであつたが、その前に擧げた戲作的な可笑しみの規ひや誇張的な技術の方に強く拘泥つて行けば、西鶴はその自ら觸れ得てゐる題材の意味とは風馬牛に、専らナンセンスな可笑しみなどを娛んでゐたとも云へるのであり、随つて作品の構造も題材の持つ本來的な——或はリアリステイックな意味にのみ即したそれではなく、挾雜物澤山の混沌を相貌して了つてゐることにもなるのである。前に引いた「調諺歌船」のやうな、云々理屈つばい筋を強調した作品の後に、「金紙七髻結」はねもとゆひのやうな、賑やかに派手な可笑しみを覗つた章を續けて置くなどといふのが、亦西鶴に於ける一つの作品構成法の型になつてゐる點から云へば、それが西鶴に於ける意識的な努力であつたことも明瞭なのである。「七髻結」といふのは、若く綺縹もよいのに髪は所謂十筋右衛門の見苦しさであるのを、漸く鬘でごまかしてゐる女が、煩く嫉妬するのに腹を立てた一代女が、猫を仕込んでその鬘に飛



びかゝらせ、女に恥を與へた後、彼女の位置を奪つて了ふといふ、そんなことを書いたものだが、前段「歌船」が上記の通りびつちりした知的構成を持つた、それだけ飛躍や空想的な可笑しみのない、その意味で平坦な記述であつただけに、其處に感じられるかも知れない退屈さを塗り潰すつもりで、かうした刺戟の強い、云はゞ波瀾と可笑しみとの多い章をそのすぐ後に續けたものと観られるのである。それは無論西鶴に於ける讀者を豫想しての作家的配慮（趣向）であつたらうし、さうした配慮の裡に、彼が必しも寫實主義作家としてのリアリティや筋の探求をのみ第一義としてゐた作家でなく、存外多く技術的な趣向などにも苦勞した作家であつたことの、反證も見出されると思ふのである。さうしてそれが却つて彼の作品に序次のない亂雑さを現象させるやうな場合をも生じさせたのである。嚴しい作家でありながら、嚴しさよりも娛しさの方を意識的には追求してゐた西鶴であつた——少くともさういふ一面のあつた西鶴であつたことは、争へない事實なのである。

さういふ點と關聯して考へられることは、西鶴の裡になほ幾分か認められた美文意識の問題であらう。尤もそれは『一代男』に若干の醜化主義的な氣取りとして現れてゐたものが、改めて讀者を豫想することになつて流石に幾らか固くなつてゐた『二代男』の場合に稍々顯著化され、『五人女』『一代女』『男色大鑑』等の感傷味と匂ひ合はれて殊に強く打出された後、作者の寫實主義が愈々深まつて行くに連れて漸次稀薄になつて行つたものであつたのみならず、それが特に著しくは『一代女』や『五人女』の感傷性と結びついたり、もともと不自然強調的な同性愛の、その意味で矢張り感傷味を必要とする表現と結びついたりした時、最も著しく發揮されてゐたのであることを思へば、それは漸次に確なものになつて行つた寫實主義精神が、美文的表現をもその性によつて利用してゐたものと觀られぬことはない。題材によつてその表現に若干の變化を與へる程の神経と才能とを西鶴が持つてゐたことは、例へば上記「七髻結」の冒頭を

「烏羽黒の髪落、みだれ箱十寸鏡の二面、見しや假粧部屋の風情、女は髪頭姿のうはもりといへり。」

といふやうな、「歌船」のそれなどとは相當異つた調子のもものではじめてゐたりするところなどにも、容易に知られることであつた。第一「金紙七髻結」といふ表題のつけ方其物にしても、上記のやうな内容と如何にもよく呼應した響を孕んでゐることを感じさせよう。さういふ西鶴の才能と感覺とが、美文をその性によつて利用し驅使してゐるのであつて、美文意識に曳摺られてゐるのでないことは云ふ迄もないけれども、それにして、彼がさうした美文的表現を全部的に卒業したのでもない、随つて「まこと」の意味を押出すためには文章など無くしても關はぬといふ程の意識を持つのは反對に、文章で讀ませ味はせようとするやうな意識をも、多少は残してゐたのであることを思はせるのではないかと思ふ。『五人女』の場合に、五つの作品を形式的にはすべて相似た五齣物に纏め上げてゐること其他、さういふ意味での形式主義作爲主義の

目立たしさを、相當著しく示すことになつてゐるのも、相似た理由から來た現象であつたらう。『一代男』以來數年間の作家的習熟を経て來た西鶴は、此作の頃に、恐らく最も強くその藝術家意識に着することになつたのであらう。それが彼の技術的苦心を強めて、リアルな筋以上の作爲的な纏りを持つた、此の『五人女』のやうな作品をも成就させたのであらうと思ふ。『五人女』を西鶴作中の傑作と評する人が多いのは、一つにはさういふ點からも來てゐることなのであらうと思ふが、それはその作の味ひに感傷的な強調性があつたのと同じく、リアリストとしての西鶴の渾成ではなかつたのである。寧ろ卒業しそこねた作爲的な技術意識が其處に最も端的に指摘出来るものになつてゐるのだと思ふ。

兎まれ西鶴は、嚴しく鋭い目を持つた寫實主義の作家であつたが、その反面に、裝飾主義や藝術遊戯の戯作者氣質に類するものをも、相當色濃くは持つてゐたのである。それが其の作品の構造をも、徹底的に寫實主義的なものとも云へない、技術的な

感じの相當強く來るものにしたたり、挾雜物澤山のものにして了つたりしたのである。前者はまだしも、後者はやはり西鶴作品に於ける著しい暗側面の一つであつた、と云はねばなるまい。凄い程深いところに觸れた作家だと思はれる半面、彼が兎角馬鹿氣た出鱈目に生きたかに思はれ勝ちなのは、無論其處から來てゐる。彼の作品にはさういふ感じ方を必至とするやうなちんばさが著しかつたのである。

それは無論根本的には彼の鋭い感性とそれとは餘りにも並行しなかつた知性（思索性）の弱さとの結合が生んだものであつたし、それがまた時代一般の特徴であつたからこそ、此期に於ける文藝復興には知性の解放が伴はなかつたなどとも、時に云はれたりしてゐるのだが、さういふことの結果として、彼の作品には、作者自身の意圖とはまるで別なところに、その作品としての價値が認められるやうなものが、一再ならず現れてもゐるのであつた。處女作『一代男』にしたところで、跋を書いた弟子の西吟などさへ明に云つてゐる通り、たゞ「大笑ひ」を要請する「轉業書」としてものさ

れたものに過ぎなかつた。にも拘らず、それは近世的な人間主義や愛慾生活の諸斷面を、當時として極限的な境まで描き盡してみせた、素晴らしい作品になつてゐた。『本朝二十不孝』の如きも、作者の意識的な建前としては不孝者を戒しめる教訓を意圖したものであつたが、その教訓にも多少の時代的な意味があつたのは云ふ迄もないものゝ、あの作に於ける最も主要な作品的價値は、「不孝者」とか「悪人」とかいふ言葉で規定されてゐる元祿町人の逞しい生き方と、さういふ逞しさに對する作者の興味の寄せ方とに、見出されることになつてゐる。詰り教訓とは眞反對の、作者自身の所謂「惡」を突詰めて描いたところに其作の意義があり、さうして描かれたものを通して、作者が露に語らうとした教訓より、もつと深いモラルが示唆されてゐることになつてゐるのである。

かういふものを見ると、西鶴の知性が、彼自身一應は觸れて然もこれを正しく捉へてゐる題材の意義を、正しく意識化することの出來ないものであつたことが、愈々明

瞭になるのでなければならぬ。つまりさういふ場合の彼は、彼自身の企んだ意圖や構造の外に、却つて作品の第一義を漂はせて了つたのである。よく捉へてゐながらこれを正しく解釋するとか、その解釋を生かすための作品構成を成就するとかいふだけの、十分な思想性が無かつたのである。

さういふ點と關聯しても一つ此處に考へられるものは、彼の作品に屢々示されてゐた過程と結論との餘りに著しい不均衡さである。「永代藏」の「昔は掛算今は當座銀」を見給へ。世間が華美になつたにも拘らず商賣は手詰つて、「擱取」など更に無くなつたことを述べたあとで、さういふ中で素晴らしく仕出して來た三井九郎右衛門の新商法を紹介したものである。

「手金の光むかし小判の駿河町と云ふ所に、面九間おもてに四十間に棟高く長屋作りして新棚を出し、萬現銀賣に掛値なしと相定め、四十餘人利發手代を追ひまはし、一人一色の役目、たとへば金襴類一人、日野郡内絹類一人、羽二重一人、紗綾一人、紅類一人、麻袴類一人、毛織類一人、この

ごとく手わけをして天鷲絨一寸四方、緞子毛貫袋になる程、緋縹子錠印長、龍門の袖覆輪かたかたにても、物の自由に賣渡しぬ、殊更俄目見えの鬘斗目いそぎの羽織などは、其使をまたせ數十人の手前細工人立ちならび、即座に仕立てこれを渡しぬ、さによつて家榮え毎日金子百五十兩ならしに商賣しけるとなり。」

云ふ迄もなくこれが今日の三井なり三越なりといふものゝ濫觴であり、當時に於ける商業様式の一つの變化を語るものであつた譯だが、例へば其處に語られてゐる布の切賣りといふ程度の才覺——人間の持つ知慧の力と、四十餘人の利發手代や手前細工人等のさうした才覺への協力とが、一般的な不況を打開して大きな成果に連つて行く貌を具體的に語つてゐる點で、此作は上記「艶妾」などよりも一歩さきの、解放された人間の智慧や力が大きな成就に連つて行く、さういふ素晴らしい可能性を孕むものであることを、強く示唆するものになる譯であらう。とすれば、其處に随分積極的なテーマが孕まれてゐる譯だが、それを智慧や殊に持ち場持ち場を通しての人間多數の

協力の問題と観る代りに、専ら「現銀賣り」を工夫した個人的な才覚の問題としてのみ解釋してゐる此作では、さうした智慧の力の集積が生み出した結論としても、たゞ餘りにもあつけなく空疎なものを提示してゐるに過ぎなかつた。

「いろは付の引出に唐國和朝の絹布をたゞみこみ、品々の時代絹、中將姫の手織の蚊屋、人丸の明石縮、阿彌陀の涎かけ、朝比奈が舞鶴の切、達磨大師の敷蒲團、林和靖が括頭巾、三條小鍛冶が刀袋、何によらず無いといふ物なし、萬有帳めでたし。」

あり得ぬことをも可能にし、「萬有帳めでたし」の大調和をさうした智慧や力の結論としてゐるのであるから、一應の筋が通つてゐるのは云ふ迄もない。が、その過程と結論との不均衡さは、寧ろ失笑にさへ値しない位のものであらう。リアリストとして智慧と力の素晴らしい可能性には觸れても、さてその可能性の上に立つての意義ある建設などは、一向考へられようともしてゐないのである。つまりさうした現象の意味を擱んで、その意味に立つての妥當な人生展望を持ち得る西鶴でなかつたことが、はつ

きりと知られる譯なのである。さうしてそれが西鶴の身上であつたが故に、かういふ形の不均衡さは、彼の作品には相當多く示されることになつてゐたのである。處女作『二代男』が、兎にも角にも世之介の人間(戀愛)修行と現實主義的な成長とを辿つた後で、卒然として「女護の鳥渡り」の怪しげな可笑しみを結論としたのなども、まづ大體として同軌の現象と云へようし、『一代女』にも相似たことを感じさせる「舞曲の遊興」のやうな章は多かつた。まづ人間の持つ多角的な才能に觸れてさういふ人間の形造る世界の豊かな娛しさを述べ、次いでさうした世界の中でも特に積極的に生きる人間を點出しながら、その人間に仕遂げさせる仕事は弱い妻君を持つ男との姦通でしかないといふやうな、讀み終ると同時に索然とならずにはゐられないやうな運びが、屢々見出されるのである。燃え上る力と強い意欲とは持ちながら、武士の定めた秩序の中に躡踏して、僅に色と財との中のみ生の飽満を見出してゐた町人の世界として、かういふ結論的な成就の貧しさが著しいのも亦止むを得ぬ必然であつたには相違ない

が、それにしても、さういふ限界性を破ることが出来なかつた思想性の弱さが、あれ程凄く逞しいものを孕んでゐた西鶴の作品に、殆ど常にナンセンスな馬鹿々々しさを絡みつかせて了つたり、逞しさや凄さとは或る意味で無縁な諦観やあはれの追求にとそれを傾せて了つたりしたのであることを思へば、他所事ならぬ不満と淋しさとをも感じさせるのではないかと思ふ。

が、それが西鶴一人の問題である以上に元祿時代其物の問題であつたことは云ふ迄もない。彼の作品の構造も藝術意識も、所詮は元祿時代なりその時代に於ける町人のシチュエーションなりが決定したものであつたのだから。だから其處に不満や淋しさが感じられるとすれば、それは主としてはそれを必至としたもの、方に向けられねばならぬことにならう。不十分なものではあつても、西鶴は矢張りあの時代としては最も新しく進んだものを示してゐた人であつたのだから。

## 七 時代・環境・生活の作品への投影

俳諧師西鶴の住んでゐた大阪の鑓屋町は、今も昔も場末町らしい裏町通りの、世を捨てた俳諧師などの住むには相應しい場所であつたといふ。

「垣根の蔦かづら秋霜にいたみ、朝貌淺ましく花見し朝とは格別に替りて、松の夕風綿入着よといはぬ計の聲さわがしく、南隣には下女が力にまかせて拍子もなきしころ榎のかしましく、浮世に住める耳の役に聞けば、北隣には養子との言葉からかい、後には俳言強き身の恥どもいひさがして、跡は定まつて盃事になるもをかしき人心と、我は獨り淋しく雀の小弓など取出して手慰みするに、竹の組戸をたゞきて亭坊々々と呼ぶ聲關東めきたり。誰かと立出るに案の如く其角、江戸より登りたる旅姿……」

『名残の友』の巻四「乞食も橋の渡り初め」の冒頭に、こんな風に書かれてゐるの

が、或は此の鎗屋町の住居の様子なのではないかと思ふ。「ごぼ／＼と鳴る神よりもおどろ／＼しく踏み轟かす碓の音も枕上」近く、「御嶽精進」の「翁びたる聲」も耳に近いといふ程ではなくても、何處となく『源氏物語』の夕顔住家の様子などを聯想させる書振りだとも思ふが、兎に角かういふところで、西鶴は何方かと云へば餘り豊でない元祿町人の生活を、身近に見て暮してゐたのである。のみならず、彼がさういふ場所の住人らしく、時には相當の手詰りをも経験したらしいことは、何處にあつたのか今一寸思ひ出せないが、兎に角その町人物の何處かで、「我質を置くこと幾度か」といふやうな言葉を、不用意に漏らしてゐたりすることなどから、容易に想像される。若い時の放蕩などから、「萬懸帳埒明かず屋の世之介」といふ言葉に相當するやうな生活経験も有つたらうと推定される彼は、俳諧師として、浮世草子の作者としての時代にも、さう豊に暮してゐたのではなく、だからこそ幫間的な生活などにも入込んで行つたのであらう。田山花袋の「西鶴小論」の如き、彼の姿に前垂れ掛けの小商人を想像

したりしてゐる。

が、彼がも／＼貧しい家庭の出身でなかつたことは、當時の人々にとつての高い教養であつた諸種の藝能其他を身につけてゐたことから云つても、屢々華やかな矢數俳諧興行などを試みてゐる點から云つても、容易に推定される。のみならず、藤村博士の「井原西鶴は平山藤五か」が指摘した『見聞談叢』の記事が信すべきものとすれば、彼は元來有徳な町人であつたが、妻に早く死別れ、盲目の一女があつたが、これも亦早く死亡したので、名跡を手代に譲つて隠居の身となり、旅に出たり家にゐたり生活を續けてゐたのであるといふ。とすれば、彼は、その生活に於ける他の面からの暗さは別、本來豊でなかつたとは云へなかつた筈、彼の待つてゐた窮乏の経験は、矢張り若氣の放蕩の結果とか一時の手詰りとかいふ程度のものであつたかとも思ふが、それにしても、隠居俳諧師として選んだ彼の住居が隣近い物佗しいものであつたことは、彼自身の筆が語つてゐるだけ、動かし難いことにならう。有徳な町人として

矢數俳諧興行の立役者として、町人的豪華さの面をも或る程度経験してゐた彼は、さういふ處に引込んで豊ならぬ町人生活の種々相にも身近く觸れ、一時の手詰りにもせよ貧の苦しみをも多少は味つてゐたのである。

さういふことが、富を描き貧を描いた作家としての西鶴にとつて、一つの強みであつたことは云ふ迄もあるまい。が、さてそれなら、さういふ生活環境や體驗が、何の程度直接に彼の作品に反映してゐるかといふことになる、残念ながらよく解らぬ。元祿九年に遺稿として出版された『文反古』が、果して彼の作であつたとすれば妻には早世され、盲目の子を持つてそれにも早世されたといふ、前記『見聞談叢』記載の事實などから來たかと思はれる人生の不調和を痛嘆する氣持などが、其處に指摘されるけれども。彼にあつた餘りにも厳しい鋭さなども、或はさういふ不幸な生涯が齎らしたものであつたかも知れないと思ふ。

が、さういふ點がすべて餘り正確とは云へない穿鑿であるのに對して、餘り豊でな

い町人生活を身近に見て居り、彼自身にも多少の手詰りは経験したらしい彼が、さういふ經驗に對してそれ程の屈托も持つてゐなかつたらしいことなどの方は『名残の友』などがあるだけ、却つて容易に想像される。例へば前掲「乞食も橋の渡り初め」に示されたところから云つても、「獨り淋しく雀の小弓など取出して手慰み」してゐた西鶴は、たま／＼其角の訪問を得たのを喜んで、

「年月の咄のやま、富士は不斷の雪ながら更に面白くなつて……一日語る内、互に俳諧の事など言出さぬも、洒落たる事ぞかし。」

と、只管暢やかな生活氣分に耽つてゐる。然もそれが、たま／＼訪客があつたからといふ特別の場合だけのことではなく、『名残の友』に語られた西鶴の生活氣分としては、大體常態であつたらしいのである。のみならずそれは、遙に昔の『一代男』に、「萬懸帳埒明かず屋の世之介」を書いた筆が、埒明かぬ「今の悲しさ」に壓倒される代りに、「命ながらへたらば末の世がたりにもなりなん」と、後の調和を思つて明るく笑



つてゐるのなども、呼應したものになつてゐる。さういふところから想像すると、元祿的な強く積極的な生活氣分が、恐らく西鶴をじめくした沈吟などからは遠い人間としてゐたのであらうと思ふ。『名残の友』は彼の生活氣分を全面的に傳へてゐるといふより、寧ろ苦惱を捨象した後の拘りのない生活面のみを語つた作品であつたに相違ないけれども、それにしてもさういふ著書があるといふことは、彼が苦惱しながらも潤達さを失はぬ人であつたことを、思はずには置かないのである。苦惱は割切れぬ人生問題にあつて、日常生活的な窮乏などの面にはなかつた、と云つてもいいかも知れない。と同時に、彼を追懷した「こゝろ葉」の湖梅が、

「井原入道西鶴は風流の翁にて机の菊麝を遣し、釣舟に四季のものを咲せ、哥行引曲をさとりて俳諧の通達ある事、浦山の賤の子も乳房を離してこれを問ふ。」

と書いてゐるやうな月並宗匠らしい風雅振りも、西鶴には相當著しくあつたらしい。世俗肯定の現實主義態度とさうした風雅振りとの變挺な齟齬が、西鶴作品のところど

ころに、妙に浮いた氣障つぼさなどを持たせてゐる點から推して、さういふことも考へられるのである。とすれば、さういふ點から云つても、彼は下手に窮乏などに拘泥つてはゐられなかつた譯かも知れない。

何れにしても、かうして彼自身の身邊に觸れてゐた窮乏などをさう苦にしてゐたのではないらしく思はれる彼が、あれ迄に貧を描き人間生活の惨めさに觸れ得たことの方が、貧乏生活をしてゐた彼が貧乏を巧に書いたといふのより、面白い問題を提示してゐるやうに思はれる。彼が貧とは縁遠い有徳の町人平山藤五であつたとすれば、其點なほ更強く感じられる譯であらうし、其の場合の「貧」を「富」に代へてみても、相似た面白味は感じられる譯であらう。手代に名跡を譲る程それへの執着を棄てた彼が、あれ程の物質的豪華を書き得たのだし、でなければしがたい俳諧師があれ程の豊さを美事に具體化し得たのだから。

さういふ關係は、彼と放蕩乃至遊里描寫との關係にも、同じやうに見出されよう。

俳諧師としての彼が、一面半幫間的な取巻として遊里生活に浸つてゐたのであることは、古來傳説以上の事實として信じられて來たことだが、さういふ生活が、『一代男』以下の遊里描寫や遊女紹介を可能にしたには相違ないが、然ししがない半幫間的な取巻に、直接太夫などといふものに觸れる機會が何れ程あつたか、かなり疑問なのではないかと思ふ。現に、『一代男』の卷四「目に三月」といふ章には、善吉といふ男に伴した世之介が、「たいこ女郎にさへふられて」、大いに發憤することが書かれてゐる。そんなところに存外取巻西鶴の投影があつたりするのではないかと思ふ。若い時代に想像される放蕩を計算に入れるにしても、それも何うやら『一代男』前半の構造などに或る程度の反映が見られる——その程度以上に多く出なかつたものではないかと思ふ。とすれば、さういふ西鶴が、遊里生活の種々相を究め得たのは兎に角、あれだけの遊女太夫に息を吹込み得た理由の方が、遊里に出入りした彼だから太夫も書けたといふことより、面白く考へられるのではないかと思ふのである。

尤もそれらは、西鶴が直接に溺れたり苦しんだりする代りに、離れて眺める位置心境にゐたからだと思つて了へば、それまでのものかもしれない。が、生きると同時に観る人であつてこそ、その觀察に具體性も生彩も宿るのであらうのに、生きる代りに離れて眺めてゐただけで優れた作品が出來たとしたら、それは猶更不思議なことになるのではないか。西鶴はだから決して離れて眺めてゐただけの人ではなかつたのである。たゞ彼の生きたのは個々の事例ではない元祿といふ時代であつたことが、注意を要するのである。元祿的な強く積極的な生活氣分が、西鶴をじめ／＼した沈吟などから遠ざけたのであらうと前に想像して來たが、その氣分は、同時に、「描いては徹し、究めては盡さず」に置かぬ、激しさとも逞しさとも粘り強い執着とも、連つて行かずにはゐないものだらう。つまり元祿的な激しさ貪婪さが、貧富を描いてはそのあらゆる趣相と究極所とを描き盡させずには置かず、遊女太夫を紹介してはあらゆる隱微にまで涉らせずには置かなかつたのである。釋迦も孔子も神聖なるべき古典も、何も

彼も彼等の慰みのために奮弄して顧みなかつたのが——さういふ向ふ見ずな激しさが、元祿時代の骨髄だつた。さういふ激しさが、彼等にとつて殆ど唯一つの自由な、解放された生活面であつた。愛慾生活を讚美しては、相當細微に涉つた遊里案内や遊女評判記や、乃至は手管指南書のやうなものをさへ、商品として氾濫させたのであつた。西鶴は云はゞさういふ時代の激しい精神を身を以て生きた人であつたのであつた。だから彼の作品には、その描くところに随つて、委曲性と徹到性とは生じずにはゐなかつたのである。だからまた彼の描いた遊女などは、謂ふところの寫實主義的に模寫されたものではなく、寧ろ元祿的な生命を吹込んで、理想化されたものが多かつたのである。「一代男」に描かれた遊女の中には、彼の時代よりもつと夙い頃の女達も少くなかつた。それが、タイプの相違はあつても、何れも元祿的な徹底性に於て描き出されてゐるのである。曳舟女郎が太夫として寫されたり、「一代男」巻六「心中箱」の藤浪のやうな、何うかすると彼の創作であつたのではないかと思はれるやうな

ものもあるのである。彼は直接見たところばかりを寫してゐた模寫的寫實主義の作家ではなかつたのである。

さういふ意味で、西鶴は飽く迄も元祿といふ時代を生きた人としての力を發揮したのであり、彼の生活環境とか半幫間的な生活とかいふものは、つまりさういふ西鶴の力を發揮させる縁となつたゞけのものに過ぎなかつたのである。云はゞ彼はさうした縁に觸發されて、元祿人的なその本質に徹して行つた人、それだけ彼の作品には、縁其物の投影より、もつと根本的なものが餘蘊なく揮灑されてゐることになるのである。それがまた彼が最も正しく縁を——その環境なり直接経験なりから與へられたものを、生かし得た作家だつたと結論させることになるのではないかと思ふ。

貧しくはなかつたが不幸だつたと傳へられてゐる生涯、俳諧師としての環境と生活態度、半幫間的な生活と、不十分ながら彼の個人的生活條件や直接経験を擧げて、それらと彼の作品との關係に觸れて來た筆は、當然旅行者としての彼の足跡やそれと作品

との關係にも觸れねばならぬ譯であらう。『見聞談叢』にも其點觸れられてゐたやうに、少くとも隱退後などには比較的旅勝ちに暮してゐたらしい彼は、當然相當廣い範圍に涉つて足跡を印してゐるらしく、さういふ彼が、京大阪奈良堺邊りの近間だけでなく、長崎其他様々の土地の様子を紹介し、各地の遊里の雰圍氣などを巧に描き分けてゐるのみか、『一目玉鉾』のやうな地理書まで作つてゐることは、恐らく誰でも知つてゐよう。『好色一代男』だけでも、南の長崎から北は仙臺鹽釜邊りまで、随分廣い範圍に涉つての紹介が試みられてゐるのである。さういふものゝ間に、その訪問が疑問視されてゐる土地を語つて、それだけ知識的には誤りを思はせるものを孕みながら、然も作品の表では別段さしたる破綻も見せてゐないやうな場合も、時折は見出される。知らぬ太夫を描いて生彩奕々の好文字をなしてゐる場合などと、それも或點共通なものを含んでゐる現象と云へようか。兎に角『一目玉鉾』が、奇妙な地名を擧げてそれへの距離を如何にも自信あり氣な數字で示したりしてゐるのなどが、事の確否よりも寧ろ

愉快な面白さを感じさせるのは、遊女太夫の姿がそれとして正確なものであるより寧ろ元祿的な面白さを見せてゐるのと、或る程度まで同軌の現象であらうと思ふ。さういふ西鶴であり、西鶴の作品であつたといふことが、十分注意されねばなるまいと思ふのである。それが恐らく西鶴作品の、瑣末な模寫主義や所謂糞リアリズムに墮したものでないことを、はつきりと知らせる譯であらうから。

## 西鶴作品の現代的意義

西鶴のリアリズムは、正宗白鳥氏によつて、バルザックのそれに比せられた。

「ある時代の社會相人間生活を廣く深く描叙した作家は、日本に於ては西鶴に及ぶものなく、日本のバルザックと云つてもいゝだらう。作風の著しく異なるのは、日本趣味と西洋趣味の相違に基くのだが、西鶴は自分の好みに従つて、『人間喜劇』を書残したのだ。」（西鶴について）

嘗て芥川龍之介が「バルザックには何でもある」といふやうなことを云つてゐた

が、西鶴にも亦それに似た廣さや複雑さがあるのを、白鳥氏は云はうとしてゐるのであらう。

元來西鶴の主要な作品は、今更云ふ迄もなく、元祿町人生活の諸様相を、町人的な立場に立つて、描き上げたものであつた。貞享から元祿にかけて、所謂早期資本主義が漸く形を整へはじめ、従つて町人階級はその飛躍的な發展段階に入つたのでありながら、家康以來の巧妙嚴酷な政策に制約せられて、彼等はその生活の自由と歡びとを僅に蓄財と好色生活との二面に於てのみ、享受することが出来たのであつた。さういふ時代、さういふ町人の生活相を、西鶴は細緻と精妙とを極めて寫し出したのであつた。その點で彼は確に古今獨歩の作家であつたけれども、彼自身當時の町人の置かれた政治的・社會的な位置などに就て、正しい認めも理解も有つてゐた筈がなかつたのだから、さうした細緻精妙な觀察を綜合して、思想的な社會批判や統一された理論を組立て、來ることは無論出来なかつた。だから彼の作品に、今日の讀者にとつての、發

展的な方向への示唆があるとは云へなかつた。其處にはたゞ當時の町人生活が内包してゐた矛盾撞著を、そのまゝに孕んでゐるやうな形だけが著しかつた。と云つて不可ければ、新興町人階級の逞しい生活力が、矛盾も撞著もあらゆるものを引つくるめて、すべてを攝取消化して行つたのと同様に、彼も亦あらゆるものを肯定し受入れて、これを其儘その作品に再現したと云つたらよからう。結果は、彼の作品が、當時の町人生活の全面容を盡すだけの多彩な複雑さを有ち得たのであつたと同時に、その究極に於ては、結局さうした無整理の混沌から、町人生活に對する新しく發展的な展望の可能性を見失つて、半ば絶望的に——或は諦觀的に、これを突放さざるを得ないといふことにもなつたのであつた。彼の作品の中でも高い評價を與へられてゐるものゝ一つである『置土産』の、色と金とに役せられた人々のすべてを放下して、たゞ食入るやうに鋭く彼等の姿に眺め入つてゐる冷たく冴えた味ひは、かうして必然的に生れなければならぬものであつた。それは當時の町人階級の中に生きて、然も彼等の負

はされた政治的制約その他に對して完全に盲目であつた彼として、無論必至の結論であつた。さうした意味での必至の結論に到達する以外、何ものをも説き得てゐなかつたところに、彼の作品の限界があつたとも考へられる。彼の作品に認められる教訓や道義的口吻も、無論單なる身振りや匿身だけのものではなかつたけれども、それは却つて白鳥氏が上記論文に於て彼を「俗物」と規定してゐた、さういふ世俗主義的な心構への卑俗さを思はせるもので、彼の作品に於ける十分積極的な成就とは云へぬものであつた。さういふ點から云ふと、西鶴の作品は、今日の讀者に、さう多くの直接的な示唆を與へるものとは、云ひかねる位のものかも知れない。彼が觀てゐた程の悲劇喜劇の種々相を觀ながら、さういふ結果になつてゐる點では、夙く元祿の昔に四方郎朱拙が、「一生を夢裡に辿れるあさまし」といふやうな非難を、彼に加へてゐたことなどさへ、聯想されたりするのである。

が、さうした點や、彼が文學に對して必しも正しい自覺を有つてゐたのではなかつたらしい點は、云ふ迄もなく彼の脊負うた時代的宿命として、一應は評價の圏外に置かれてもいゝものであらう。寧ろさうした宿命の中にゐながら——それ故に解決のない矛盾や悲劇をじつと見詰めてゐながら、然も其處から眼を逸らしたり、超越的な境涯への脱却を意圖したりしなかつた、その強さ逞しさは、さういふものとして嘆賞されていゝのだらうと思ふ。俗物的な處生訓などを提示したのも、さういふ強さ逞しさの昏い知性と結びついた現象でなかつたとは云へなかつた。知的に云へば昏いのだが、其處に提示された結論には何等の價值もなかつたのではあつた。が、さういふ結論を生み出さずにゐなかつた粘り強さは、矢張り一つの價值だつたと思はれるのである。さういふ粘り強さと逞しさとが、彼をバルザックにも比肩させた程の作家にして行つた、と云ふことも出来るのであらう。

さういふ強さ逞しさを、白鳥氏は同じ文章で「ふてぶてしい」といふ言葉で規定してゐる。それは恐らく志賀直哉氏が「圖太さ」といふ言葉で規定したのと、同じもの

を指してゐるのだと思ふが、その「ふてぶてしさ」とか「圖太さ」とかいふものは、作家としての西鶴に於ける、對象のあらゆる隅々までをも貪り究めずにはゐなかつた作家的貪婪さのことにならう。或は對象のあらゆる隱微、あらゆる奥深い實相深淵をも、目じろぎもせず諦視した強さのことであらう。つまり作家的冷酷さである。志賀直哉氏は『二十不孝』の冒頭二作を評して、

「それは餘りにと云ひたい位徹底してゐる。もしくは病的にと云つた方がいゝ。若し自分が書くとなれば、あゝ無反省に慘酷な氣持を押通して行く事は、如何に作り物としても出来ないと思つた。親不孝の條件を並べるだけは出来るとしても、それを或る強いリズムで一貫さす力は逆もないと思つた。」（『暗夜行路』）

と書いてゐる。それこそは作家西鶴にとつての、最も大きな財産だつた。それは單なる個性的なものである以上に、所謂元祿時代といふものゝ性格であつたのだが、彼は云はゞさうした時代の性格を身一つに生き抜いてみせたやうな作家であつたのだ。だ

からこそ矛盾にも悲劇にも崩折れることなく、その立場に執着し續けもすれば、當面の對象たる町人生活の諸様相を徹見して、これを精細巧緻を極めて描き出すことも出来たのだ。社會狀勢の進展が如何に人々の生活態度を變移させるか、黄白萬能が如何に人々を踊らせるか、捌け口を塞がれた力が如何に惑溺的な好色生活などに人間を沈湎させるか、等、等、上記のやうな政治的制約下に旋回する世相の中核的な問題が彼の作品には、混沌未整理の外貌を通じてゐながら、極めて力強く、然も微妙に提示されてゐるのだ。觀念的思想的的人生觀的に正しい把握と理解とを有ち得なかつただけに、さうして正しく觸れ得た問題をそれとして整理することには、慘めな無能力さを示した「俗物」であつたに相違ないけれども、彼はかうして元祿世相乃至町人生活の實相を、具體的根柢的に描き出すことには、非常な成功を示すことになつたのだ。嘗て田山花袋が、

「かれはむづかしい金の悲劇を取扱つた。私達作家の願ひとしては、女と金とを十分に理解した



い。金を唯物質と思つてゐるやうな心の簡単な境から離れて、金即心、金即女といふ境、更に進んで、物質即心といつたやうな境、さういふ境に入つて行きたい。かう思つても中々其處には行けない。女はまア書けても金は容易に描けない。何故なら女には詩があるが、金には詩がないからである。詩のない金を描いて、それが眞に達するといふことは容易なことではない。それを西鶴は胸算用永代藏で、モウバツサンやチエホフが書いたもの以上に、本當の金を書いた。」(西鶴小論七)

と云つてゐたのも、西鶴が元祿町人作家として與へられた課題に、或る意味では十分徹底的な解答を與へたことの傍證にならう。その町人生活に對する豊富な知識と鋭く深い観察とによつて、彼は同時代の誰よりも元祿町人生活の實相を傳へ得たのであつたと同時に、元祿時代と同様なあらゆる時代の、金と不自然な制約とに支配された人間生活の根底にある問題に、多くの示唆を投げ得る作家となり得てゐるのである。さういふ意味では、彼の作品に示唆的なものが無かつたなどとは、決して云へぬことに

なるのであらうし、さういふ點での含み多さや多彩さ複雑が、彼を常にバルザックに比肩させるのみならず、チエホフやモウバツサンより優れたとまで云はせることになつたのだと思ふ。西鶴作品の意義は、無論その點にかゝつてゐるのだと思ふ。

とすれば、それを可能にした彼の強さ逞しさと、さうした強さ逞しさと結びついたその立場への粘り強い執着とが、今更ながら高く評價されていゝ譯であらう。殊に今日が、所論能動精神論などが喧しく論議されてゐながら、結局その動いて行くべき方向をも立てかねてゐる程、あるべき人生の歸趨が見失はれて、混沌と不安と低迷とがすべての上に覆ひかゝつてゐる、そんな時勢であるだけに、さうした意味での強さや諦視に、殊に強く心惹かれることにもなるのであらうと思ふ。混沌と錯雜との底を見究めて、現象の奥深くに横はる問題の在り方をまづ吟味する——さういふことのためには、西鶴的な強さや冷徹な諦視が何よりも必要なのだから。だからであらう、武田麟太郎氏が、

「私もいつかは井原西鶴が、日本永代蔵、世間胸算用乃至織留の諸短篇集のうちに書き盡したやうな金銭の世界にまで觸れて行きたいと念願してゐる。」(『金銭について』)

と書いてゐるのなどははじめとして、單に金銭のみならず、一般的な寫實主義への氣運も、漸次濃密化しようとするやうな氣運が、文壇の一部に仄見えないでもないやうに思はれる。上記のやうな諦視は持ちながら、西鶴がその上に立つてのより建設的な人生展望が持てなかつたのとは違つて、今日のさうした寫實の深まりが、新しく發展的な未來を豫表するやうなものに連る契機となれば、それは随分素晴らしい仕事になる譯であらう。西鶴は自身にさういふ仕事を成し遂げきりはしなかつたけれども、それを成し遂げるに足る程の資質と力とは、示してゐた作家であつたと云へるのである。

=

『置土産』の卷二「人には棒振虫同然に思はれ」が、眞山青果氏によつて戯曲化され

た。それが西鶴作の意義を何んな風に生かしたものが知らないけれども、たまたま目に觸れた某新聞の劇評には、零落しながら昔のまゝの大盡氣質遊女氣質を失はぬ利右衛門夫婦を、何か滑稽なところのある人達と感じてゐるやうな、妙に小馬鹿にしたやうな趣が感じられた。

元來西鶴の描いたものは、解放された意欲を持ちながら武士の支配に甘んじて拘束されてゐた、さういふ町人の生活相だつた。幾ら彼等が「天下の町人」を誇つても、彼等に許されてゐたのは専ら官能的な樂慾と金の世界とだけだつた。然もさうした拘束をそれと意識することの出来なかつた彼等は、さうして僅に許された世界での優者——大盡であり遊女であることに、たゞ只管な誇りを感じてゐたのだ。樂慾と金との他何も持たない彼等には、つまりその他には誇るべき何もなかつたのだから、さうなるのが當然だらう。棒振虫同然の零落に沈んでも、利右衛門夫婦はだから必死にさうした誇りを維持しようとしてゐるのだ。それは、今日から觀れば、無論相當滑稽

な姿でないこともない。今日からどころではない、西鶴自身、既に其處に一抹の滑稽を感じてゐたのであつたらしい。利右衛門宅に押かける昔の遊び仲間、七十過ぎて明日をも知れぬ老婆が、來年の花を楽しみに朝顔の種を取つてゐるのを見て、呆れて顔を眺めてゐるだらう。西鶴は利右衛門夫婦に、此の「七十餘りのば」<sup>一</sup>と同じものを観てゐたのだ。それが今日の人間に呆れた可笑しさを感じさせるのも、或は當然かも知れないと思ふ。

が、それが、たゞ滑稽な可笑しさをのみ感じさせるものでないことも、云ふまでもあるまい。七十過ぎてても後生願はず、零落しても町人的理想に生きようとする態度は可笑しいよりも寧ろ怖るべき元祿町人の生活力とか、<sup>二</sup>人間的執着の強さとかいふものを、強く打出してゐることにもなるのだから。その意味ではそれは人間に於ける頼もしさを描いたものとも云へるのだ。

とすると、さうした強い生活力が、或る意味ではナンセンスとも感じられる大盡乃

至遊女としての誇りなど、結びついてゐるだけで、それ以外の何ものにも結びついてゐないといふことは、たゞ滑稽なだけではない、一種の惨めさとしても、受取られねばならぬことにならう。強く逞しい生命力とか、それと結びついた人間的な誇りとかいふものは持ちながら、それを云はゞナンセンスな形でしか表現することが出来なかつたといふところには、つまりは上記の時勢的な制約の重さが、色濃く投影させられてゐたことになるのだから。西鶴の作品には、『置土産』ばかりではないそのすべてを通じて、さうした制約下にある故の人間の惨めな姿が、何時でも認められるのだ。

のみならず、『置土産』其他晩年の作品には、上記のやうな制約以外に、も一つ顯著に影を投じてゐるものがあつて、それがその惨めさに更に特殊な陰翳を添へてゐるのだ。他でもない、それは所謂銀が銀を儲ける世の中の組織が固定化して、それだけ選ばれた小數以外の一般的下積の町人世界には、上記のやうな制約以上に、銀からさへも閉め出され、随つて銀であがなふ豪華潤達な樂慾の追求からも閉め出された、つま

り何もない空白に漂ふ人間の惨めさが著しくなつてゐるのだ。七十過ぎて猶來年の樂しみを豫想し、然もしがなく朝顔の種など摘んでゐる老婆に象徴されてゐるやうに、『置土産』などには、さういふ何もなく頼りない空白に浮びながら、然もなほ町人的な誇りや人間的な執着に生きようとしてゐる人間の姿が、まざまざと描き出されてゐるのだ。その人物の滑稽さを指摘された真山氏の『置土産』は、さうした意味の惨めさをも正しく捉へてゐるのであらうか。とすれば、それはたゞ人物の滑稽を云はれるだけでなく、その滑稽を包んでゐるペースなどをも、同時に感じさせるものである筈だと思ふが――。

西鶴を究めること深く、語釋方面での發見などをも多く示してゐる真山氏であるから、さういふ方面にも恐らく遺漏はないのであらう。にも拘らずそれが某新聞の劇評家などに多く受入れられなかつたとすれば、西鶴はもう今日には生き得ない作家といふことになるのであらうか。さうだと云へないこともないやうな氣もする。が、西鶴

の人物の持つ惨めさ哀しさがその背後に曳摺つてゐるものは、今日にとつて必しも馬牛の問題とのみも思はれない。「何が利右衛門夫婦を然く悲哀な、然も滑稽な存在たらしめたか」の探求は、今日にも決して無意味な仕事とは思はれないのである。とすれば、其點を捉へることにこそ――またそれを可能にするやうな西鶴作品のいろいろな角々を探ることにこそ、西鶴作品の現代的意義の探求もあり得る譯であらう。真山氏の『置土産』がさういふ「何が」の點への示唆までを孕んでゐるものであつたら、利右衛門夫婦も多分馬鹿氣で滑稽な人物とばかりも見えなかつたのであらうと思ふが、實際は果して何うだつたのであらうか。明日をも知れぬ老年期の頼りなさの中で、一度陽にあへば造作なく萎んで了ふ儂い花をせめてまた見る娛しみだけに繋がれて、いそいそと其種を摘んでゐる人間の姿には、昏惑と低迷との重苦しく澱んでゐる現代に、せめて微な光を求め頼つて生きてゐる人間の生活を、象徴するやうなものがあるとも云へるのではないかと思ふ。さういふ人間の相の由來を探ることは、現代人

を強く直接的に鼓舞することにはならぬかも知れぬけれども、と云つても現代人への或る反省や人生観察への、相當の示唆を孕まぬとも云へまいと思ふ。とすれば、西鶴がなほ現代にも生き得ぬ作家であるとは決して云へない筈であらう。西鶴作の現代化やその享受は、さういふ意味での西鶴の現代的意義を、十分に生かし得たものでありたいと思ふ。

## 三

異つた時期に書かれた以上二つの文章で、筆者は西鶴の現代的意義を、寫實主義作家としての強さ逞しさと、さうした寫實主義作家の観てゐた人間の姿が曳摺り脊負つてゐるものゝ影とに、見出さうとしてゐる。が、さうして二度も同じ題目を興へられてゐながら、西鶴の現代的意義として最も重要なものは、まだ確實には捉へられてゐなかつたやうに思ふ。寫實主義作家としての強さ逞しさも、その寫實主義が捉へた人間

の姿の含み多さも、それらなりに西鶴作品の價値であつたには相違ないが、より重要なものは、矢張り彼がその人間主義なり現實主義なりの思想的立場を、強く生き抜いた點に見出されよう。儒教的な規範主義や形式主義がまだ強く要請されてゐた時代に、元祿時代入らしい一途さを以て人間を正面に押出し、純情とまことゝを基礎とする人間主義のモラルを強く主張した彼は、自主的自力的な人間の生き方とさうした人間の力の持つ可能性とに、朗かな讃歌を送つたのであつた。だから彼の作品には朗かな哄笑が多かつた。さうして朗かに笑つてばかりもゐられぬ人生の不如意や不調和をも徹見しながら、矢張りその立場に執着する態度は棄てなかつた。白鳥氏の所謂ふてぶてしさは、さういふ點についても云はれたことであつたかも知れない。結果として彼の作品には究極的な敗北がなかつた。勝たない迄も負けはしなかつたのである。前節に掲げた利右衛門夫婦にせよ朝顔の種取る老婆にせよ、さういふ西鶴の人物らしくさういふ意味での崩折れぬ人間意欲の象徴として描かれてゐるが故に、じめじめした

暗さよりまづ可笑しさを以て印象されることにもなるのであらう。それが襟を正させる嚴肅さや悲痛さを感じさせる代りに、寧ろ慘めな影を曳摺つてゐるものとなつてゐるところには、元祿時代の時勢的必然と、さうした必然の中に躑躅させられてゐた町人西鶴の思想的限界性其他、いろいろなことが考へられなければならぬけれども、さういふところにあるいろいろの示唆を孕みながらに、兎にも角にも明るい肯定觀を生き通してゐる人間の姿には、矢張り或る頼もしさがある筈なのだと思ふ。ましてさういふ複雑な陰を帯びてゐない『一代男』や『永代藏』の人々の場合をやであらう。それらの作が、何れも自力人間の強い肯定に立つものであるが故に、讀者はそれに接してまづ愉快にならずにはゐない筈であるし、それだけで西鶴の現代的意義が一通り生かされたとも云へるのである。今日の知性は、まづさうした西鶴の明るい肯定觀を領略して、さうして其上で、さうした肯定觀に生きた西鶴なり元祿町人なりが、上記のやうな慘めな滑稽さなどをその究極の相として行つた、その由來を、西鶴のその

如く嚴しく然もより新しい寫實主義を以て、探ることを任とする必要があるのであらう。その任務が果された時、西鶴の統を繼いで然も彼には望まれなかつたより積極的建設的な仕事も、はじめて可能になるのであらう。それを可能にするために、西鶴の思想的立場が正しく領得されねばならないのである。舊稿二つを讀返してみても、その最も大持な點に觸れ残してゐたやうに思ふので、それを簡單に附加へて置くことにする。頼原退藏氏も書いてゐたやうに、西鶴は芭蕉や近松よりも、もつと健康な作家であつたのである。

## 附記

そちこちの雑誌その他に発表した西鶴に関する断片を輯めてみたら、こんな書物が出来た。昭和八年七月の「文學」に載せた「談林派の運動と西鶴」が最も舊く、十年三月やはり「文學」に載せた「西鶴の現代的意義」の第一節、同年七月「解釋と鑑賞」の「描寫力」、八月「文學」の「自然觀」、十一年四月「國語と國文學」の「町人的世界觀の反映」などがこれに次ぎ、今年になつてから「古典研究」の増刊號や「新潮」「俳句研究」などに発表した「一代男の意義と限界」「作品の構成と藝術意識」「諦觀の必然」などが最も新しいものである。

比較的長い期間に涉つて、然も断片的に書いて来たものだが、かうして輯めるについて、一通りの手入れなり増補なりはしたので、全體として一應の統一はついてゐることゝ思ふ。が、いろいろな點での重複は避けることが出来なかつた。其點は讀者の御諒恕を願ふ。

のみならず、バルザックに比せられ、チエホフ・モウパッサンよりも優れてゐると評された西鶴のすべてを、これだけの論稿で盡すことも無論出来てはゐない。が、本書は本書なりに、出来るだけ一面的にならぬやうに、西鶴といふ作家の相を、見詰めようとしたものにはなつてゐるつもりである。貧しいなりに、遺漏のない、全圓的な西鶴研究への一つの礎石位には、成り得ようと思ふ。敢て世に送る所以である。

(昭和十五年五月・初校を了つて—著者)

昭和十五年六月十日印刷

昭和十五年六月廿一日發行

【西鶴論稿】

定價金壹圓七拾錢

外地定價金壹圓八拾七錢

不許複製



著者 片岡良一

發行者 小竹即一

東京市芝區田村町一丁目三番地

印刷者 福山福太郎

東京市牛込區西五軒町三四番地

發行所

東京市芝區田村町一ノ三  
振替口座東京二二九三四

合資會社

萬里閣



エト4J-49  
外1732  
た

成瀬 正勝著  
森鷗外覺書  
四六判三三二頁箱入  
價一・八〇 送・一〇

關 みさを著  
清少納言とその文學  
四六判三八八頁箱入  
價二・〇〇 送・一四

保田與重郎著  
後 鳥 羽 院  
四六判三七〇頁箱入  
價二・〇〇 送・一四

飯野<sup>文學士</sup>哲二著  
おくのほそ道の基礎研究  
菊判三六〇頁箱入  
價三・八〇 送・一八

淺野 晃著  
岡倉天心論攷  
四六判三六〇頁箱入  
價二・一〇 送・一四

東京芝田村町一ノ三  
編者東京一四七九三三  
—— 思 潮 社

終